

ニ依リ徵集スベシ其ノ外ニ事宜ニ由リ之ヲ要スルトキモ亦之ヲ徵集スベシ

(乙)

荷 九十五條 國會ハ少クトモ毎歲一回集會ス○通常會期ハ九月第三ノ月曜日ニ開會ス

○國王ハ須要ト判斷スルトキ臨時會議ノ爲ニ兩院ヲ召集ス

葡 十八條 國王ノ宜命アル議院ノ開會ハ毎年一月二日ニ於テスベシ

瑞 四十九條 議會ハ現在ノ憲法ニ基キテ毎年一月十五日ニ於テ通常會トシテ集會ス若

シ祭日ニ當レバ其翌日ニ集會ス然レドモ國王ハ尋常會ノ歸時ニ臨時集會トシテ議會ヲ召集スルコトヲ得

此ノ他ニ又甲乙ノ兩様ヲ折衷シ國王毎年召集ノ命ヲ發シ若シ王命ナキトキハ議院固有ノ權ニ依リ定期ニ集會スルコトヲ掲グル者アリ左ノ如シ

(丙)

丁 四十一條 國王ヨリ定期ノ前ニ議會ヲ徵集スルニ非ザレバ議會ハ十月第一月曜日ニ

於テ集會ス

白 七十條 兩院ハ定期ノ前ニ國王ヨリ徵集ノ命アラザルトキハ當然ノ權ニ依リ毎年十

一月第二ノ火曜日ニ集會ス

第三十三條

非常ノ要用アルニ當テハ特ニ上諭ヲ發シ臨時兩院ヲ召集ス

臨時會ノ會期ハ又上諭ニ由リ便宜之ヲ定ムベシ

(參照)

丁 二十條 國王ハ會期ヲ定メテ特ニ國會ノ臨時會ヲ徵集スルコトヲ得

瓦 百二十七條一項 國王ハ三年毎ニ國會ヲ召集シ著大ナル免稅ヲ要シ又ハ緊急ノ國事

アルニ由リ要用アル毎ニ臨時之ヲ召集ス

瑞 四十九條末項 王ハ尋常會ノ歸時ニ於テ臨時ノ國會ヲ徵集スルコトヲ得

荷 九十五條第三節 國王ハ自ラ須要ト判斷スルトキ兩院ヲ召集シテ臨時會議ヲ開ク

葡 七十四條 國王ハ左件ニ由テ節制權ヲ執行ス

第二國益ノ爲ニ須要ナル時會期ノ歸時ニ於テ臨時ニ國會ヲ召集スル事

普 七十六條 前條ニ見ユ

瑞典 百九條末項 臨時ノ集會ハ國王ノ便宜ト判スルニ從テ散會ス但其日期ハ尋常參會

ヨリ短キヲ要ス

第三十四條

兩院ノ會期ハ三箇月トス

兩院ノ閉期ヲ延引スルハ上諭ニ由ルベシ

(參照)

白 七十條 兩院ハ每年少クトモ四十日間集會スルヲ要ス

丁 十九條二項 兩院ハ國王ノ許可ヲ得ズシテ二箇月以上集會スルコトヲ得ズ

荷 九十八條二項 國王第二十七條ニ掲グル權理ヲ使用スルニ非ザル外通常會期ハ少ク

トモ二十日間ニ亘ル七十條ハ解散ノ權ヲ謂フ

瑞 百九條首項 尋常會ハ議院自己ノ請求ヲ除クノ外開院後滿四月ヲ終ラザレバ散會スルヲ得ズ

西 增補六條 國會ハ每歲代議士院確定編制ノ日ヨリ起算シ少クトモ四箇月間集會スベシ

葡 十七條 立法官ノ任期ハ四年トス而シテ每歲ノ會期ハ三箇月トス

普 五十二條 國王ハ議會ヲ延留スルコトヲ得 但シ本院ノ承認ナクシテ延留二十日ヲ越ユルコトヲ得ズ

獨 二十六條 上院ノ承認ヲ得ズシテ下院ノ延會ヲナスノ時間ハ三十日ニ過グベカラズ

下院ノ延會ハ一週會間ニ於テ再度之ヲナスコトヲ得ズ

第三十五條

兩議院ノ開閉及延會ヲ命ズルハ總テ上諭ニ由ル

(參照)

普 五十一條 王ハ兩院ヲ徵集シ及閉會ヲ命ズ國王ハ一時ニ兩院ヲ解散シ或ハ其ノ一ヲ

解散スルコトヲ得○此ノ時ハ國王必ズ解散ノ日ヨリ六十日以内ニ選舉人ヲ徵集シ而シテ九十日以内ニ議會ヲ徵集スベシ

西 二十六條 國會ハ每歲集會ス其之ヲ召集シ延會シ閉會シ或ハ代議士院ヲ解散スルハ國王ニ屬ス

獨 十二條 皇帝ハ聯邦議院及國會ヲ徵集シ開會シ延會シ及閉會ス

埃 代議篇十九條 帝國議會ヲ延會シ及下院ヲ解散スルノ權ハ皇帝ノ命令ニ屬ス○解散ノ場合ニ於テハ第七條ニ準ジ新ニ議員ノ選舉ヲ行フ

伊 九條 國王ハ每歲兩院ヲ徵集ス又之ヲ延會シ及代議士院ヲ解散スルコトヲ得但解散ノ場合ニ於テ四箇月内ニ於テ他ノ議會ヲ徵集スベシ

其他議院開閉ノ儀式ハ其莊重ヲ要スルヲ以テ各國或ハ之ヲ憲法ニ掲ゲタリ一二ノ例左ノ如シ

西 三十一條 國王ハ親ク國會ノ開閉ヲ宣命シ又ハ執政官ヲシテ之ヲ宣命セシム

葡 十九條 國王宣命スル議院ノ開閉ハ兩院ノ合會ニ於テ其式ヲ行フ貴族院ノ議員ハ右

ニ列シ代議士ノ議員ハ左ニ列ス

瓦 百八十條一項 國王ハ親ク國會ヲ開閉シ又ハ之ガ爲ニ全權ヲ委任シタル一ノ執政ヲ

シテ之ヲ行ハシム

普 七十七條 兩院ノ開閉ハ國王親ラ宣命シ又ハ特ニ委任シタル一ノ執政ニ由テ之ヲ宣

命スルコト兩院合會ニ於テス

本案ニ於テハ議院開閉ノ宣命式ハ一ノ儀文ニ屬スルニ過ギザルヲ以テ之ヲ議院法律ニ載セテ之ヲ憲法ノ正條トナサバルナリ

第三十六條

議院ノ開閉及延會及閉院ノ延期ハ兩院同時ニ之ヲ行フベシ

一議院解散ノ命ヲ受ケタルトキハ併セテ他ノ議院ヲ閉會スベシ

(參照)

荷 九十九條 國王ハ一院又ハ兩院ノ解散ヲ命ズルトキ併セテ國會ノ閉止ヲ宣告ス

普 七十七條第二項 兩院ノ徵集開會延會ハ皆同時ニ於テス 其ノ一院ヲ解散シタル時

ハ他ノ一院ハ當然ニ延會スベシ

葡 四十三條 貴族院ノ會期ハ代議士院ト終始ヲ同クス

伊 四十八條 元老院及代議士院ノ會期ハ同時ニ終始ス

一院ノ會期時限ノ外ニ他院ノ集會ハ總テ全ク無効トス

第三十七條

必要ノ場合ニ於テ兩議院又ハ一議院ヲ解散スルハ天皇ノ大權ニ由ル

議院解散ノ命ヲ受ケタルトキハ其命ヲ得タル日ヨリ二月内ニ上諭ヲ以テ新タニ選舉ヲ行ハシ

ムヘシ

解散ノ命ヲ受ケタル議員ハ仍再ビ選舉ニ當ルコトヲ得

(參照)

白 七十一條 國王ハ兩院ヲ同時ニ或ハ各別ニ解散スルノ權ヲ有ス解散ノ文書ニハ四十

日間ニ選舉人ヲ徵集スルコト二月間ニ議員ヲ徵集スルコトヲ載ス

葡 七十四條 國王代議士院ヲ解散シタル時ハ更代スベキ代議士院ヲ即時ニ召集スヘシ

荷 七十條 國王ハ國會兩院ヲ同時ニ又ハ各別ニ解散スルノ權ヲ有ス

國會解散ノ勅令ハ同時ニ四十日内ニ新議院ノ選舉及二月内ニ該議院ノ召集ヲ命ス

瓦 百八十六條第二項 國王ハ又國會ヲ延會シ及解散スルノ權アリ 國會ヲ解散

シタルトキハ遅クトモ六個月内ニ新ニ之ヲ召集スベシ此ノ時ハ新ニ代議士ヲ選舉シ而シテ前任ノ代議士ハ再ビ選ニ當ルコトヲ得

獨 二十五條 下院ヲ解散シタル場合ニ於テハ解散シタル日ヨリ六十日ノ間ニ選舉人ヲ徵集シ九十日ノ間ニ更ニ下院ヲ徵集スヘシ

丁 二十二條 兩院ノ一ヲ解散スルトキハ二個月ノ間ニ更ニ兩院ヲ徵集スベシ

伊 九條 國王ハ下院ヲ解散シタル日ヨリ四個月内ニ更ニ之ヲ徵集スヘシ

普 五十一條第二項 (前條ニ見ユ)

第三十八條

代議院ノ議長副議長ハ一會期ゴトニ議院之ヲ公選ス

(參照) 各國ノ例代議士院ノ議長ハ議院ヨリ候補數人ヲ選舉奏上シ國王其中ノ一人ヲ任命スルアリ (甲)又ハ國王自ラ之ヲ任命スルアリ (乙)又ハ議院之ヲ選ビ君主之ヲ認可スルアリ

(丙)又ハ議院ノ公選ニ任セ政府之ニ干涉セザルアリ (丁)甲ノ方法ヲ取ル者ハ荷蘭^{八十四條}瓦敦堡^{四條}百六十^{百六十}ハ三員ヲ薦奏シ佛朗西^{四十四條}八百十四年ノ憲法^{三條}及葡萄牙^{二十}ハ五員ヲ薦奏スル是ナリ乙ノ方法ニ依ル者ハ瑞典^{五十二條}是ナリ丙ノ方法ニ從フ者ハ英國及佛國千八百十五年ノ憲法是ナリ丁ノ

方法ニ從フ者ハ白國^{三十條}普國^{七十條}獨逸^{二十條}埃國^{九條}西國^{二十條}丁抹^{六十條}伊國^{四十條}是ナリ

議長ノ任期ハ或ハ一會期ニ止ムルアリ^{各國比例ヲ多シトス}或ハ議員ノ任期ニ從フアリ^{佛千八百十五年憲法}今一二例ヲ舉ク

普 各院ハ其事務ノ規則及紀律ヲ定ム又其議長副議長書記官ヲ選ブ

伊 四十三條 代議士院ノ議長副議長及書記官ハ會期ノ始メニ於テ其會期間ノ爲ニ代議士自ラ之ヲ選任ス

第三十九條

代議院ハ自ラ其當選議員ノ資格ヲ檢查シ退職又ハ除名ヲ議決ス

(參照)

米 第五章一條 各院ハ其議員ノ選舉及權利證憑ノ裁判官タルベシ

同 二條 各院ハ其規則ヲ制定シ其不相當ノ所行アル議員ニ對シ三分二ノ多數ヲ以テ除名スルコトヲ得ベシ

瓦 百六十條 爭議アル議員資格ノ檢查結果ハ之ヲ內閣ニ報知シ又他ノ議院ニ通知スベシ

白 三十四條 各院ハ其議員ノ權任ヲ檢查シ權任事件ニ付起ル所ノ爭議ヲ判決ス

西 二十八條 立法各院ハ其内部ノ紀律ニ係ル規則ヲ制定シ及議員ノ資格ヲ検査ス代議士院ハ其外ニ代議士選舉ノ正當ナルヤ否ヲ判決ス

荷 九十三條 各院ハ新ニ選派セル議員ノ權任ヲ検査シ及權任若ハ其選舉ニ關リ起ル所ノ爭訟ヲ判決ス

伊 六十條 各院ハ其所屬議員ノ證票ノ効力ヲ審理スルノ專權ヲ有ス(丁抹)
選舉ノ爭訟ヲ判決スルヲ以テ之ヲ代議士院自治ノ權ニ歸シタルハ各國ノ同キ所ナリ、但シ英國ハ千八百六十八年ノ法律ヲ以テ之ヲ「コムモレプリ」裁判所ニ歸シ、而シテ下院ハ單ニ資格ヲ検査スルノ權ヲ有スル者トセリ、本案ハ此レニ依ル

第四十條

兩議院ノ會議ハ公聽ヲ許ス

但シ左ノ場合ニ於テハ公聽ヲ禁ズヘシ

一、議長又ハ十名以上ノ議員ノ要求ニ由リ公聽人ヲ退散セシメ嗣テ議院ニ於テ秘密會議タルベキコトヲ決議シタルトキ

二、天皇ノ詔命ヲ以テ内閣ヨリ秘密ノ通牒ヲ得タルトキ

秘密ノ會議ハ刊行スルコトヲ許サズ

(參照)

佛 千七百九十八年 百八條 立法議院ノ會議ハ公行スベシ其會議ノ筆記ハ之ヲ印刷スベシ

同 百九條 立法院ハ何レノ場合ニ於テモ內會議ヲナスコトヲ得ベシ

各員ハ之ヲ求ムルノ權ヲ有ス

內會議ノ間ハ傍聽人ヲ退出セシムベシ議長其席ヲ退キ副議長取締ヲ爲スベシ

瓦 百六十七條 第二院ノ會議ハ公行ス議事ハ印刷ヲ以テ之ヲ公布ス第一院ニ於テハ少

クトモ議事公布ノ方法ヲ必要トス

傍聽人合圖ヲ以テ可否ヲ表スル者ハ直ニ之ヲ退場セシムベシ

同 百六十八條 執政又ハ國王ノ委員王命ヲ以テ政府ノ通知ノ事件ニ付發議スル爲ニ要

求スルトキ又ハ議員三人以上ノ要求ニ付傍聽人退散セシ後議院ノ之ヲ可トスルトキハ

秘密ノ會議ヲナス

白 三十三條 兩院ノ會ハ公行ス然レトモ各院其議長若ハ議員十人ノ要求ニ依リ內會議

ヲ爲ス

嗣テ全多數法ヲ用ヒ同事件ニ付公會ヲ以テ之ヲ議スルヲ要スル歟ヲ決ス

西 三十四條 元老院及代議士院ノ會議ハ公行ス特別ノ場合ニ當テハ秘密會議ヲナスコ

トヲ得ヘシ

白 二十三條 兩院ノ會議ハ公行ス但國益ノ爲ニ祕密ヲ要スベキ場合ヲ除ク

荷 九十六條 兩院ノ會議ハ兩院合會ト否トヲ問ハズ總テ公行ス

兩院ハ其議員十分ノ一之ヲ要求シ或ハ議長之ヲ須要ナリト判ズルトキハ内會議ヲ爲ス
議會ハ祕密會議ニ於テ論議スベキヤヲ決ス祕密會議ニ於テ論議シタル事件ハ祕密會議
ニ於テ決スルコトヲ得

伊 五十二條 各院ノ會議ハ公行ス然レドモ議員十人ノ要求ニ由リ祕密會議ヲ行フコト
ヲ得

埃 代議篇 二十三條 國會兩院ノ會議ハ公行ス然レドモ兩院ハ議長若ハ少クトモ議員
十名ノ要求ニ當リ傍聽人ヲ退クルノ後該院ニ於テ之ヲ可決スルトキハ特ニ祕密會議ヲ
ナスノ權ヲ有ス

丁 六十五條 兩院ノ會議ハ公行ス然レドモ議長又ハ規則ニ定メタル所ノ議員ノ許多數
ハ議員ニ非ザル諸人ヲ院中ヨリ退去セシメンコトヲ求ムルコトヲ得嗣テ議院ハ其議事
ノ件ヲ公行スベキカ又ハ祕密ニスベキカラ決ス

普 七十九條 兩院ノ會議ハ公行ス

議長若ハ議員十人ノ要求ニ依ル時ハ各院ハ内會ヲナス其要求ノ可否ヲ議スルモ亦内會
議ヲ以テス

第四十一條

兩議院ハ出席議員半數ニ滿タザルトキハ議事ヲ開クコトヲ得ズ

(參照)

白 三十八條三項 各院ハ其議員過半數ノ參會ニ非ザレバ議決ヲ取ルコトヲ得ズ

伊 五十三條 西、三十七條等同シ普國ハ更ニ法ニ定メタル過半數ノ語ヲ加フ其文左ノ

如シ

普 八十條一項 各院若シ法ニ定メタル所ノ過半數出頭セザル時ハ議決ヲ取ルコトヲ得
ズ(但千八百五十五年五月三十日ノ法律ヲ以テ此ノ條ヲ改メ上院ハ少クトモ六十名ノ
出會ヲ要スルコトトセリ)

又瑞西及獨逸ニ於テハ更ニ其意義ヲ明確ニス

瑞 七十六條 議會ハ出席ノ代議士其全員ノ眞過半數ヲナスニ非ザレハ議事ヲ行フコト
ヲ得ス

獨 二十八條 帝國議院ハ投評ノ眞過半數ヲ以テ決ヲ取ル決議ノ効力ヲ有スル爲ニ法ニ

乙案草案

定メタル全員ニ據リ計算シタル過半数ノ出頭ヲ必要トス

荷蘭ニ於テハ兩院合同會議ニ於テモ亦同一ノ例ニ依ル即チ左ノ如シ

荷 百條 兩院ハ議員ノ半数ヲ越ル以上出席スルノ外各別ニ又ハ合同シテ議定スルコトヲ得ス

又瓦敦堡及奧地利ハ二院各々其法ヲ異ニスルコト左ノ如シ

瓦 百六十條 第一院ハ其議員ノ半数ノ出頭ニ依テ第二院ハ其議員三分ノ二ノ出頭ニ依テ之ヲ組成ス

同 百七十五條 兩院ノ會議ハ第六十條ニ掲ゲタル各院ノ組成ニ必要ナル人員出頭セザル時ハ議決ノ効ナシ

奧 代議篇十五條 帝國議會ノ議決ヲ効力アラシムル爲ニ代議士院ノ議員百名貴族員四十名ノ出頭ヲ必要トシ及兩院ニ於テ各々投評人ノ眞過半数ヲ得ルヲ必要トス

又丁抹ニ於テハ議員ノ投評ニ預カラザル者ヲ以テ出頭セザル者ト同ジク視ル

丁 六十一條 各議院ニ於テ議員ノ過半出頭セズ及可否ノ投評ニ與カラザルトキハ決ヲ取ルコトヲ得ズ

第四十二條

議事ハ出席議員ノ過半数ニ依テ決ス可非同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

(參照) 議事ノ決ハ過半数ニ依ル各國ノ同キ所ナリ可否同數ナルトキハ或ハ之ヲ廢案トシ

(甲)或ハ議長ノ決スル所ニ依リ (乙)或ハ之ヲ後會ノ決ニ讓ル (丙)其例各々異ナリ

英國ハ上院ハ乙ノ法ニ從ヒ下院ハ甲ノ法ニ從フ

(甲)ノ例左ノ如シ

白、三十八條一二項

凡決議ヲ取ルハ投票ノ眞過半数ヲ以テスベシ但選舉及候補推舉ニ係ル兩院ノ規則ニ由テ

定ムベキモノハ此限ニアラズ

投票平分ノ場合ニ於テハ其議案ヲ廢棄ス

普 八十條二項

各院ハ過半数ヲ以テ議決ヲ取ル但撰擧法ニ定メタル特例ハ此ノ外タリ (伊 五十四條

葡二十四條 瑞西 七十七條 西 三十七條同)

(乙)

瓦 百七十六條

兩院ノ議決ハ多數ニ從フ而シテ議件ノ輕重ニ依テ或ハ過半数或ハ比較多數ニ依ル若シ可

否同數ナルトキハ議長ノ説ニ從ヒ之ヲ決定ス但憲法ノ條目ヲ改正スルトキハ出席議員三分ノ二以上ノ投票ヲ必要トス

獨 七條中

聯邦議院ノ議ハ此國憲ノ第五條第三十七條第七十八條ニ掲載シタル制限ノ外ハ通常過半數ニ依ル犯則ノ投票ハ之ヲ算入セズ若シ可否平分スル時ハ議長ノ投票ヲ以テ之ヲ決定ス

(丙)

荷 百一條

凡議決ハ投票ノ過半數ヲ以テ之ヲ取ル可否平分スルトキハ決定ヲ後會ニ讓ル

該會又ハ總會議員出席ノ會ニ於テ猶平分スルトキハ其議案ヲ廢ス

第四十三條

各議院ノ事務及會議ノ方法ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(參照)

各國ニ於テ會議ノ方法其重キ者ハ之ヲ憲法ニ掲ゲ而シテ其輕キ者ハ之ヲ議院内部自治ノ權ニ歸シタリ獨リ巴威爾ニ於テ千八百十八年公布憲法ノ外別ニ千八百五十年七月二十五日ノ法律ヲ以テ國會召集及成立^{第一章}兩院警察書記室兩院ノ職員、費用^{第二章}會議、議事、投票、決議、政府兩院ノ關係^{第三章}ヲ規定シタリ、而シテ該法律第一條ニハ仍左ノ辭ヲ以テ議院自治

ノ餘地ヲ存シタリ曰各院ハ左ノ條則及憲法ノ條則ニ循由シテ自ラ議事章程ヲ定メ必要ナル場合ニハ又之ヲ變更スルノ權ヲ有スト

埃國ハ巴威爾ト同一ノ方法ヲ取リタリ

其他各國ニ於テ議員内部ノ自治ハ皆憲法ノ認ムル所ナリ今其一例ヲ舉グ

普 七十八條 各院ハ其ノ事務ノ規則及其ノ紀律ヲ定ム又其ノ議長副議長書記官ヲ選ブ

白 四十六條 各院ハ議院規則ニ由テ各其ノ權任ヲ施行スル法式ヲ定ム

西 二十八條 立法院ハ紀律ヲ正クスル爲ニ其内部ノ規則ヲ定ム

第四十四條

上下議院ハ相當ノ敬禮ヲ守リ天皇ニ意見ヲ建議スルコトヲ得

(參照)

普 八十一條 各院ハ院議ヲ以テ國王ニ建言スルノ權ヲ有ス

丁 四十五條 各院ハ國王ニ向テ建言スルノ權アリ

荷 百十三條 法律議案ノ外兩院ハ各別ニ其他ノ起議ハ國王ニ奏上スルコトヲ得

瓦 百二十四條 國會ハ憲法ニ於テ定メタル關係ニ循ヒ君主ニ對シ國權ヲ維持スルヲ以テ職務トス此職務ニ由リ其同意ニ依リ立法權ノ施行ニ參與ス若シ行政上懈怠又ハ濫弊

アルトキ又憲法ニ違背シタル處分アルトキハ國王ニ對シ建言又ハ歎訴ヲ爲シ及審議ヲ經テ要用ト認メタル租稅ノ徵收ヲ承認スルノ權ヲ有ス殊ニ國憲ノ主義ヲ遵守シテ國王及本國ノ爲ニ一致ニシテ分ツ可カラザルノ利益ヲ圖ルヲ以テ任トス

瑞典

百七條

政體委員ハ內閣大臣總員或ハ其内ノ一員又ハ數員公務ノ爲ニ輔弼ヲ爲ス

ニ當テ王國ノ實益ヲ維持セズ或ハ執奏ノ一員公平忠貞智慮勞動ヲ致シテ以テ負荷重大ナル職位ノ義務ヲ盡サバ爾コトヲ看出ストキハ其趣ヲ議院ニ通達スルノ權アリ議院ハ此通知ヲ得タル上ニテ國益ノ爲ニ緊要ト判ズルトキハ文書ヲ以テ國王ニ建言シ該員ヲ免ジ內閣大臣ノ位置ヲ削ルコトヲ請求スベシ

此ノ案件ハ議會ノ兩院中ヨリ之ヲ發言シ政體委員ノ外ノ委員ヨリモ之ヲ議院ノ議ニ提出スルコトヲ得ベシ然モ政體委員ニ於テ之ヲ檢査シタル上ニ非ザレバ議院ニ於テ之ヲ決定スルコトヲ得ズ。議院ニ於テ此ノ案件ヲ議論スルニ當リ國民ノ權利又ハ利益ニ屬スルコトニ至テハ國王ノ趣意ハ之ヲ表明スルコトヲ得ズ又議院ノ檢査ニ付スルコトヲ得ズ劾奏ヲ受ケタル者免職ノ結局ハ議院ノ檢査ヲ經テ之ヲ可否シタル所ノ案件既ニ落着スト看做スベシ故ニ其次ノ集會ニ於テ既決ノ事件ノ關係ニ付更ニ之ヲ檢査シ其罪ヲ責ムルコトアルベカラズ(政體委員ハ議院中分課ノ名)

第四十五條

兩院ハ人民ヨリ呈出シタル請願ノ文書ヲ受ケ政府ニ移牒シ又ハ意見書ヲ付シ天皇ニ上奏シ或ハ主務大臣ノ辯明ヲ求ムルコトヲ得

請願ヲ受ルノ方法ハ法律及議院規則ノ定ムル所ニ依ル

(參照)

白

四十三條

各人民ハ兩院ニ向テ自身ニ請願書ヲ進ムルコトヲ禁ス自身出頭シテ進呈スルヲ禁ズ但書記局ニ附進スベシ。各院ハ受ル所ノ請願書ヲ諸執政ニ送付スルノ權ヲ有ス。諸執政ハ該院ノ要求

アル毎ニ其ノ請願書中ニ載スル所ノ事件ノ上ニ辯明ヲ爲スノ義務アリ

伊

五十七條

丁年ノ國民ハ議院ニ向テ請願書ヲ進ムルノ權アリ議院ハ委員ニ附シテ請願書ヲ調査セシメ而シテ委員ノ報告ニ由テ其ノ視察ニ付スベキヤヲ討議ス若シ之ヲ決定スルトキハ其請願書ヲ主任ノ執政ニ送付シ或ハ緊要ナル審査ノ爲ニ設ケタル分局ニ

付ス

同

五十八條

何人モ自身ニ議院ニ向テ請願書ヲ進ムルコトヲ得ズ

同

五十九條

各院ハ總代人ヲ受ケ及議員執政又ハ政府委員ノ外佗ノ人ノ陳述ヲ聽クコトヲ禁ズ

普 八十一條第二項 何人モ兩院ニ向テ自身ニ請願又ハ文書ヲ呈出スルコトヲ得ズ
各院ハ受取ル所ノ請願書ヲ各執政ニ送付シ書中ニ載スル所ノ嘆訴ニ付キ執政ノ辨明ヲ
求ムルコトヲ得

佛 千八百
十五年 六十五條 請願ノ權ハ總テノ國民ノ爲ニ之ヲ保證ス請願ハ各個人ニ之ヲ爲ス
請願書ハ政府或ハ兩院ニ呈出スルヲ得ベシ但シ兩院ニ呈出シタル者モ亦(皇帝陛下)
ノ名當ヲ記ス可シ議員一名請願ノ保證トシテ之ヲ呈出ス其文書ハ公然ニ之ヲ朗讀ス若
シ議院ニ於テ之ヲ視察ニ付スベシトスル時ハ議長ヨリ之ヲ皇帝ニ進呈ス

瓦 三十六條 各人ハ法律又ハ規則ニ違背シタル行政處分ヲ受ケ又ハ判決ノ遲滯スル場
合ニ當テハ當該ノ上司官衙ニ文書ヲ以テ歎訴ヲ呈シ遞次ニ上等所管ヲ逐ヒ最高政府ニ
迄其結局ヲ求ムルノ權ヲ有ス

同 三十七條 若シ官衙ニ於テ其歎訴ノ理由ナシト認ムルトキハ其訴狀ヲ却下スルニ付
歎訴人ニ其裁決ノ理由ヲ示明スベシ

同 三十八條 若シ歎訴人最高官衙ノ判決ニ不服ナルトキハ文書ヲ以テ國會ニ歎訴シ其
干涉ヲ要求スルノ權アリ國會ニ於テ其歎訴ハ既ニ行政ノ各等級ヲ經過シ及ビ受理スベ
キモノト認ムルトキハ内閣ハ其要求ニ應ジ必要ナル參照ヲ通報スルノ義務アリ

第四十六條

各院ノ必要ナリトスル場合ニ於テハ内閣大臣ニ質疑ノ文書ヲ送付シ其辯明ヲ求ムルコトヲ得
(參照)

佛 千七百九
十三年 七十七條 立法會議ハ相當ト判スルトキニハ行政院ノ全部又ハ一部ノ出頭
ヲ呼ブ

普 六十條末項 各院ハ執政ノ出頭ヲ要求スルコトヲ得
一千八百五十年七月
二十五日ノ法律

同 十八條 議員ヨリ政府ニ對シ説明ヲ求メントスルトキハ文書ヲ以テ簡略ニ其理由ヲ
述べ議長ニ出ス可シ議長ハ其文書ヲ直チニ當該ノ執政ニ送達ス可シ

同 十九條 説明ヲ求ムル文書ハ之ヲ議長ニ出シタル後次回又ハ遅クトモ其次ノ會議ニ
於テ提出セシ議員他ニ其理由ヲ敷衍スルコトナク之ヲ朗讀スルヲ要ス其後直ニ衆員ノ
賛成アルヤヲ問フベシ

同 二十條 若シ其文書議院ノ賛成ヲ得タルトキ執政ハ直ニ之カ答辯ヲナシ又ハ答辯ヲ
ナスベキ日限ヲ定メ若クハ答辯ヲ爲ス能ハザルノ理由ヲ明示スルヲ要ス

同 二十一條 既ニ答辯シタル後ハ其説明事件ニ付討論スルヲ許サズ若シ説明ヲ求メタ
乙案草案 六〇七

ル議員答辯ニ満足セザルトキハ式ニ依リ建議ヲ爲スコト自由トス此建議ハ議事章程ニ定メタル手續ニ循フ可シ

普 代議士院規則

三十一條 大臣ニ對シテ爲ス質疑ハ一定ノ式ヲ以テ記載シ三十名ノ議員之ニ署名シ議長ニ提出スベシ議長ハ其寫ヲ以テ之ヲ内閣ニ通知シ議院ノ次會ニ於テ其質疑ヲ答辯スルヤ否ヤ及ビ何時之ヲ爲スヤノ回答ヲ求ム内閣ニ於テ其答辯ヲ爲スベキ旨ヲ回答シタルトキハ内閣ノ指定シタル日ニ於テ質疑員ハ其質疑ニ付精細ナル演說ヲ爲スコトヲ得

三十二條 質疑ノ答辯セラレタル時又ハ之ヲ否拒セラレタル時ハ少クモ議員五十名之ヲ建議シタル場合ニ限り直チニ其質疑事件ヲ論議スルコトヲ得、此論議ニ當テハ建議ヲ爲スコトヲ許サズ但シ建議ノ式ニ從ヒ更ニ質疑事件ヲ追究スルハ各議員ノ隨意タルベシ

丁 六十二條 兩院ノ議員ハ本院ノ承認ヲ得テ一切ノ公事ヲ討議ニ付シ及其旨趣ニ付執政ノ辯明ヲ求ムルコトヲ得

第四十七條

兩議院ハ事務ヲ審査スル爲ニ各省ニ向テ必要ナル當該事件ノ報告及證憑文書ヲ求ムルコトヲ得、但シ各省ノ外他ノ官衙ニ向テハ直接ニ往復スルコトヲ得ズ

(參照)

巴威爾議院法律 三十三條 兩院及委員ハ其職權ノ範圍内ニ於テ必要ト認メタル説明及

參照ヲ當該省ニ要求スルノ權アリ而シテ當該省ハ其要求ニ應スルヲ要ス

其他ノ官吏トハ直接ノ關係ヲ有スルヲ得ズ

委員ハ又鑑定人ノ口頭意見ヲ聞キ又ハ意見書ヲ差出サシムルコトヲ求ムルヲ得ベシ

何人モ右ノ意見陳述ヲ與フルコトヲ強ヒラル、コト無カル可ク又之ガ爲ニ國庫ニ費用

ヲ生ゼシムルコトヲ得ズ

其他議院ニ審査委員ヲ設クルノ權ハ英國及各國ノ認ムル所ナリ一二ノ例左ノ如シ

白 四十條 各院ハ公益事件ヲ調査セシムル爲ニ議員中ヨリ委員ヲ設クルコトヲ得此委員ハ調査ノ爲ニ必要ナル參照ヲ口頭或ハ書面ヲ以テ呈出スベキコトヲ官衙又ハ人民ニ求ムルノ權アリ

埃 代議篇二十一條 帝國議會ノ各院ハ執政ニ各其職掌トスル事務ヲ訊問シ政府ノ措置ヲ検査シ請願事件ニ付辯明ヲ執政ニ求メ委員ヲ命ジ執政ヲシテ必要ナル報知ヲ致サシ

メ照會又ハ決議ノ公式ヲ以テ其意見ヲ發スルノ權ヲ有ス

通國事務篇二十八條 帝國議會ノ代理官ハ通國事務執政官若ハ其一員ニ訊問書ヲ送り答辯

又ハ説明ヲ要求シ及審査委員ヲ設ケ執政官ヲシテ須要ナル報告ヲ致サシムルノ權ヲ有

ス

執政彈劾權ニ關スル條項參照

英吉利ニ於テハ執政彈劾ノ權ハ平民院ニ存シ貴族院ヲ審判ス其ノ有罪ニ決スル時ハ免職公權
剝奪追放罰金禁錮若クハ死刑等ノ刑罰ニ處ス此レ立憲各國ノ英國ニ倣ヒ憲法ノ基礎トスル所ナ
リ今其正條ノ一二ヲ舉ゲ

白 九十條 代議士院ハ執政ヲ論告シテ之ヲ大審院ニ提喚スルコトヲ得大審院ハ全員合

會シテ之ヲ裁判スルノ權ヲ有ス但被害人要償ノ私訴及執政ノ職務ヲ外ニ犯シタル重輕
罪ニ係リ法律ニ定ムベキ者ハ此例ニ在ラズ

一ノ法律ヲ以テ執政責任ノ場合及科罰及代議士院ノ告訴又ハ被害要償ノ訴ヨリ起ル糾
治ノ規程ヲ定ムベシ

普 六十條 各議院ハ執政ノ憲法違犯及贓賄及謀反ノ罪ヲ論告スル事ヲ得大法院其事ヲ

裁決スベシ別段ノ法律ヲ以テ執政ノ責任ノ場合及糾治處分及刑律ヲ定ムベシ

此ノ條ノ所謂別法諸執政ノ罪件糾治刑律ヲ定ムベシト云者現
ニ猶未タ定合アラズ而シテ憲法ノ元則未ダ適用スルニ至ラズ

佛國歷次ノ憲法及西十九條三十九條伊三十六條葡四十一條奧第三篇十六條、十八條、丁十四
條二十六等皆同ジ

奧國ニ於テ執政ノ告訴裁判ノ手續ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ムベキコトノ約束ヲ揭ゲタルコ

ト十八條普國ニ同ジ其後原文年ノ法律ヲ以テ執政責任ノ方法ヲ定メ之ヲ決行シタリ

第四十八條

兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ陳述シタル意見及投評ニ付糾彈ヲ被ルコト無カルベシ但シ議院提
則ニ於テ定ムル處分ハ此條ノ關涉スル所ニ在ラズ

議員自ラ其言論ヲ新聞紙ニ公布シタルトキハ普通ノ法ニ依リ責任スベシ

(參照)

議院内ニ於ケル言論ノ自由ハ議院規則ヲ除キ何等ノ制限ヲ爲スコト無キ者アリ(甲)又ハ一

二ノ制限ヲ爲ス者アリ(乙)

(甲)

白 四十四條 兩院ノ各議員ハ其職ヲ行フニ由テ吐露シタル意見ニ係テ追糾檢治セラ

ル事ナシ(荷九十二條 西、四十條 伊、五十一條 葡、二十五條)

獨 三十條 議院ノ議員ハ何時ニ於テモ其投評及其職ヲ行フニ由テ吐露シタル意見ノ爲ニ裁判上又ハ紀律上ニ告訴セラル、コトヲ得ズ又其件ニ付議會ノ外ニ於テ責ヲ負フ事ナシ

普 八十四條 議員ハ投評ノ爲ニ及會議ニ於テ吐露シタル意見ノ爲ニ糾治ヲ被ラシムルコトヲ得ズ但シ議院規則ニ循ヒタル院中ノ處分ハ此ノ限ニ在ラズ(典十六條同)

丁 五十七條 國會ノ議員ハ本屬議院ノ許可ナクシテ院中ニ於テ吐露シタル意見ノ爲ニ議院ノ外ニ於テ責ヲ受ケシムル事ヲ得ズ此レニ據レハ議院ノ許可ヲ得テ議院中ノ發言ヲ追糾スルコトヲ得

(乙)

瓦 百八十五條 何人モ國家ニ於ケル演說又ハ投評ニ付責ニ答フルノ義務ナシ然レ共政府國會又ハ一個人ニ對シタル侮辱、讒謗ハ法律ニ依リ通常ノ手續ニ從ヒ處罰セラルベシ又或國ハ議員ノ自由ヲ其言語行爲凡ソ議員タルノ資格ニ於ケル一般ノ事件ニ迄推廣シタリ瑞典 百十條 國會ノ議員ハ少クトモ投票者七分ノ五ノ多數ヲ得タル本屬議院ノ明確ナル決議ニ依リテ糾彈ヲ許スニ非ザレバ其議員タルノ資格ニ就キタル行爲言語ノ爲ニ糾彈ヲ受ケ自由ヲ奪ハル、事ナカルベシ

第四十九條

兩院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外亂ノ罪ヲ除ク外開會ノ間議院ノ承諾ナクシテ逮捕スルコトヲ得ズ

前項ニ指定シタル場合ニ於テ議員ヲ逮捕シタルトキハ司法大臣ヨリ直チニ所屬議院ニ報知スベシ

議員ノ拘留ヲ受ケ及治罪ノ處分ヲ受ケタル者ニ付所屬議院ヨリ要求スルトキハ開會ノ間其處分ヲ置閣スベシ

(參照)

普 八十四條、第二項 凡ソ議員ハ會期ノ間本屬議院ノ承認ナクシテ刑事犯ノ爲ニ糾治又ハ拿捕ヲ受ケシムルコトヲ得ズ但シ本日或ハ翌日發見サレタル現行犯ハ此ノ例ニ在ラズ

其ノ負債要償ノ爲ニ拘留スルモ亦同ク本屬議院ノ承認ヲ要ス
本屬議院ノ求メアル時ハ會期ノ間民事刑事ヲ論ゼズ凡ソ糾治拘留皆之ヲ解放ス

白 四十五條 兩院ノ各議員ハ本屬議院ノ承認ヲ經ズシテ會期ノ間刑事ノ爲ニ追糾拿捕ヲ受ケシムル事ヲ得ズ但シ現行犯ハ此例ニ在ラズ。同前ノ承認ヲ經ルニ非ザレバ會期ノ間兩院議員ニ向テ要償ノ拘留ヲ行フ事ヲ得ズ。議院ノ要求アルトキハ開會ノ間兩議

員ノ拘留及糾治ヲ置閣ス(此ノ法ハ各國共ニ英ノ慣例ニ倣フ者ナリ獨三十一條葡二十六條瑞百十二條丁五十七條伊四十五條皆同)

瓦 百八十四條 兩院ノ議員ハ現行重罪犯ノ場合ヲ除クノ外國會ノ開期中本屬議院ノ承認ヲ經ズシテ之ヲ禁錮スル事ヲ得ズ若シ現行重罪犯ノ場合ニ當リ之ヲ逮捕スルトキハ速ニ其事實及理由ヲ該院ニ通知スルヲ要ス

塊 十六條中 現行犯罪ノ場合ニ於テモ仍裁判所ヨリ即時ニ議員逮捕ノ事實ヲ該院議長ニ通知スルヲ要ス

又西班牙ハ議會開散ノ間ニ在テモ仍拿捕ノ事件ヲ以テ所屬議院ニ報知シ其ノ處分ニ任ゼシム
塊地利ニ於テハ議院ヨリ解放ヲ要求スルノ權ヲ以テ會期ニ非ザル暇時ニ迄廣メタリ十六條末項又
伊太利ニ於テ負債要償ノ爲ニ禁錮スル令狀ハ議院開會ノ間ニ止マラズ併セテ開閉ノ前後三週間に迄之ヲ下付スル事ヲ得ザル事ヲ定メタリ四十六條

第 條

兩議院ハ政府ノ承諾ヲ得ズシテ全國又ハ一部ノ人民ニ向テ公告ヲ發スルコトヲ得ズ

(參照)

巴威爾 議院法三十七條 兩院及委員ハ政府ノ承認ヲ經ズシテ全國人民又ハ一部ニ對シ

此條ハ議院法律ニ入ルベキニ於テハ此兩院ノ存シテ決

布告又ハ公告ヲ發スルコトヲ得ズ又人民ノ名代人若ハ請願書ヲ携帶シ出頭スル者ヲ受ルコトヲ得ズ

第五章 司法權

第五十條

裁判ハ專法律ニ依ル裁判官ハ天皇ノ名代トシテ其職務ヲ行フ爲ニ不羈ノ權ヲ有ス

(參照)

普 八十六條 司法權ハ不羈ノ諸法衛ニ由リ國王ノ名ヲ以テ之ヲ施行ス諸法衛ハ法律ヲ

除クノ外他ノ權威ニ從フコトナシ裁判ハ王ノ名ヲ以テ宣告及決行ス

塊裁判權憲法 一條 凡塊國ニ於ケル裁判ハ皇帝ノ名ヲ以テ之ヲ行フ上下等法院ノ宣告

ハ皇帝ノ名ニ於テ之ヲ下付ス

伊 六十八條 凡裁判ハ王ノ任シタル裁判官ニ由リ王ノ名ヲ以テ宣告ス

佛 千八百五十七條 凡裁判ハ王ヨリ出ヅ王ヨリ任叙シタル裁判官ニ由リ王ノ名ヲ以テ

裁判ヲ行フ

荷 百四十五條 凡裁判ハ全國ニ於テ王ノ名ヲ以テ之ヲ行フ

乙案試草

第五十一條

裁判官ハ天皇ノ任命ニ由ル法律ニ定ムル事由ニ因リ裁判ヲ經ルニアラザレバ免職又ハ非職ヲ命ゼラル、コトナシ

其滿六十五歳ヲ趣エ老退ノ故ニ由リ又ハ裁判篇制及其區畫ノ變更ニ由リ非職ヲ命ズルハ前項ニ抵觸スルノ限リニ在ラズ

判事補及治安裁判所ノ判所ハ此ノ條ノ例ニ依ラズ

(參照)

普 八十七條

諸法官ハ王ニ由リ或ハ王ノ名ヲ以テ終身ヲ期シ撰任ス。諸法官ハ法律ニ

定メタル事故ノ爲ニ審判ヲ受ルニ由ルヲ除クノ外官ヲ免レ及職外官トスル事ヲ得ズ。

審問中職外官ト爲シ及本人願ハザルノ轉所及老退ヲ命ズルハ法律ニ定メタル事故ノ爲

ニシ法律ニ定メタル規程ニ從ヒ而シテ審判ニ由ルニ非レバ之ヲ行フ事ヲ得ズ但事務ノ

爲ニ己ムヲ得ザル轉所ハ此例ニアラズ

換裁判權憲法

六條 裁判官ハ其職務ヲ行フ爲ニ全ク不羈獨立ナリ法律ニ掲ゲタル場合

ニ於テシ及規則ニ依レル審判ノ故ニアラザレバ之ヲ免黜スル事ヲ得ズ。法院ノ長官若

クハ上等法院ノ命令ニ由ルニ非ザレバ停職スル事ヲ得ズ而シテ即時ニ其訴訟件ヲ當該

ノ裁判官ニ移ス事ヲ要ス法律ニ定メタル場合ニ於テシ法律ニ掲ゲタル規程ニ準スルニ

非ザレバ本人ノ情願ニ違ヒ轉所又ハ老退ヲ命ズル事ヲ得ザルモ亦之ニ同ジ但此條規ハ

裁判編制ノ改革ニヨリ己ムヲ得ザル轉所又ハ老退ニ適用スルコトナシ

荷 百六十三條

大法院ノ裁判員大檢事上等法院及初告裁判所ノ裁判員ハ終身ヲ以テ官

ニ任ス此ノ裁判員及定期ヲ以テ任ゼラレタル其他ノ裁判員ハ法律ニ定メタル場合ニ於

テ裁判ニヨリ免官又ハ罷黜スル事ヲ得

裁判委員ハ其情願ニ因リ退職スル事ヲ得

伊 六十九條

郡裁判所ヲ除クノ外王ノ任ジタル裁判官ノ既ニ三年間在職シタル者ハ轉

免スベカラズ

白 百條

裁判官ハ終身ヲ以テ任ズ。裁判官ハ審判ニ由ルニ非レバ職ヲ免シ及職ヲ停ム

ル事無シ。新任人員アリテ而シテ本人許諾スルニ非ザレバ轉所アル事ヲ得ズ

丁 七十三條

裁判官ノ職ヲ行フハ專法律ニ依ル裁判宣告ノ効ニ由ルニ非ザレバ免黜ス

ル事ヲ得ズ裁判所ノ編制ヲ改革スル時ノ外其ノ同意ニ由ラズシテ轉任スル事ヲ得ズ但

其ノ滿六十五歳以上ニ至ルトキハ其俸給ヲ帶ビテ非職トナス

佛

千八百五十八條 王ニ由テ任セラレタル裁判官ハ終身不動タリ

乙案 試草

同 六十一條 治安裁判官ハ王ニ由テ任ゼラル、ト雖終身不動タラズ

第五十二條

裁判ノ對審及判決ハ之ヲ公行ス

特ニ公行ヲ閉ルコトヲ得ルノ場合ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

(參照)

普 九十三條 民事刑事トナク裁判ノ認延ハ公行トス。風俗ニ係ル事件ノ爲ニハ公行ヲ

停ムルコトヲ得

塊裁判權憲法 十條 民事刑事ノ別ナク裁判官ノ前ニ於テスル訴訟ハ口頭ヲ以テ之ヲ公

行ス。何ノ場合ニ於テ右ノ通規ニ拘ラズ特例ヲ用ユルコトヲ得ベキハ法律之ヲ定ム

荷 百五十六條 凡裁判ハ其理由ヲ説明シ認延ヲ開テ之ヲ宣告スベシ刑事ノ裁判ハ其處

斷ノ準據スル所ノ法律ノ正案ヲ示明スベシ。認延ハ之ヲ公行ス然レドモ治安及風俗ニ

關ルニ由リ法律ヲ以テ定メタル特例ハ此ノ限ニ在ラズ

伊 七十二條 民事刑事トナク裁判所ノ認延ハ法律ニ依テ之ヲ公行ス

佛 千七百九十五年 二百八條 裁判ノ認延ハ之ヲ公行ス裁判官ハ祕密ノ評議ヲ爲ス裁判ハ高聲

ニ之ヲ宣告ス裁判ハ其理由及其準據セシ法律ノ正案ヲ示明ス

佛 千八百四十八年 八十一條 認延ノ爭議ハ國ノ治安及風俗ノ爲ニ危害アル場合ノ外凡テ之ヲ

公行ス其公行ヲ爲サザルトキハ裁判所ハ一ノ宣告ヲ以テ之ヲ公示ス

白 九十六條 裁判ノ認延ハ之ヲ公行ス但其治安又ハ風俗ニ危害アル者ハ此例ニ依ラザ

ルコトヲ得此時ニ於テ裁判所ハ公行ヲ停ムルコトヲ宣告ス。國事犯及出板犯ニ係テハ

陪審ノ合員同意ニ非ザレバ閉戸ヲ宣告スルコトヲ得ズ

第五十三條

天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ズ

(參照)

塊裁判權憲法 十三條 皇帝ハ大赦ヲ下シ及法術ニ於テ裁判シタル刑ヲ特赦シ又ハ減降

シ及復權ヲ與フルノ權ヲ有ス但大臣ノ責任ニ對シ法律ニ由テ定メタル制限ハ此例ニ在

ラズ

白 七十二條 國王ハ裁判官ノ宣告シタル刑ヲ責赦シ及減降スルノ權ヲ有ス但大臣ニ係

リ法律ニ定メタル者ハ此例ニ在ラズ

大赦特赦減刑復權ノ大權ハ各王國ノ同キ所ナリ故ニ一々之ヲ例舉セズ但シ和蘭ハ較之ガ制限

ヲ爲セリ故ニ特ニ左ニ掲ゲ以テ異例ヲ示ス

荷 六十六條 王ハ裁判ニ由テ處斷サレタル刑ヲ特赦スルノ權ヲ有ス三年以下ノ禁獄ト及罰金ヲ單科又ハ併科シタル刑ニ係リテハ王之ヲ審判シタル裁判官ノ意見ヲ聽キタルノ後其他ノ罪ニ於テハ大法院ノ意見ヲ聽キタルノ後ニ此恩典ヲ行フ大赦及治罪ノ廢止ハ法律ニ由ルニ非ザレバ之ヲ行フコトヲ得ズ

第五十四條

民事刑事ヲ問ハズ裁判所編制裁判官職制及裁判章程ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム
(參照)

普 八十九條 諸裁判所ノ編制ハ法律之ヲ定ム

煥裁判權憲法 二條 法院ノ編制及權任ハ法律ヲ以テ定ムベシ法律ニ定メタル場合ヲ除クノ外非常裁判ヲ設ルコトヲ得ズ

荷 百四十六條 民法商法刑法訴訟法治罪法及司法官ノ編制ハ一ノ成典ヲナス。軍事裁判及護郷兵裁判モ亦法律ヲ以テ之ヲ定ム。各種ノ租稅ニ關ル爭訟及違令ノ裁判モ同ク法律ヲ以テ之ヲ定ム

白 九十四條 一ノ裁判所モ一ノ行政裁判權モ法律ニ依ルニ非ザレバ設立スルコトヲ得ズ。何等ノ名義タリトモ非常裁判委員及非常裁判官ヲ設クルコトヲ得ズ

第五十五條

行政上ノ處分又ハ指令ニ對シ行政官吏ヲ訴フル者ハ司法上ノ訴ト分別シ行政裁判所ニ於テ之ヲ受理ス

行政裁判所ノ組織權限及訴訟手續ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム
(參照)

煥裁判權憲法 十四條 一切ノ訴訟ニ於テ司法官ニ屬スルト行政官ニ屬スルトノ事件ヲ分別ス

同 十五條 行政官既定ノ法律又ハ制定セラルベキ法律ノ正文ニ依リ人民ノ訴ヲ裁決スルノ權ヲ有スル場合ニ當リ此ノ裁決ニ由リ權理ヲ侵サレタル一方ノ者ハ司法上ノ普通手續ヲ以テ自由ニ相手方ノ者ニ對シ起訴スルコトヲ得此ノ場合ノ外ハ行政官ノ裁決若クハ處分ニ由リ權理ヲ侵サレタリトスル者ハ行政官ノ一切ノ代表人ニ對シ行政裁判所ニ起訴シ口頭ヲ以テ公行ノ訟廷ニ於テ論辯スルコトヲ得

行政裁判所ニ於テ審理スベキ場合及ビ其組織並ニ訴訟手續ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ムベシ

第五十六條

司法部行政部ノ權限爭議ノ裁決ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ムベシ

(參照)

普 九十六條 裁判官ト政部官トノ權限ハ法律之ヲ定ム。裁判官ト政部官トノ際ニ起ル所ノ權限ノ爭ヲ決スル爲ニ一ノ法院ヲ設ク

第六章 租稅及會計

第五十七條

國稅ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(參照)

佛 千八百十四年憲 四十八條 一ノ租稅モ兩院之ヲ叶贊シ國王之ヲ裁可シタルニ非ザレバ設立

シ及徵收スベカラズ

白 百十條 國稅ハ法律ニ由ルニ非ザレバ之ヲ定ムルコトヲ得ズ

荷 百七十一條 法律ニ由ルニ非レバ國稅ヲ定ムルコトヲ得ズ

丁 四十七條 法律ノ力ニ依リニ非ズシテ租稅ヲ定メ或ハ變更シ或ハ廢除スルコトヲ得ズ

第 條

凡ソ日本帝國ニ在ル者ハ内外人ヲ問ハズ總テ其資産ニ從ヒ租稅ノ義務ヲ負フベシ

(參照)

佛 千七百九十三年憲 百一條 國民ハ國費分擔ノ榮譽ナル義務ヲ免ル可カラズ

同 千八百十四年憲 二條 國民ハ其資産ノ比例ニ從ヒ公平ニ國費ヲ負擔ス

普 百一條 租稅ニ付テ特免アルコトナシ現存セル特免ハ總テ之ヲ廢ス

同 百二條 政府官吏及地方官吏ハ法律ニ據ルニ非ズシテ租稅ヲ課徵スルコトヲ得ズ

白 百十三條 租稅ニ付テ特免アルコトヲ得ズ租稅ノ免除及寬減ハ法律ニ由ルニ非ザレ

バ之ヲ設クルコトヲ得ズ

荷 百七十二條 租稅ニ付キ特免ヲ與フルコトヲ得ズ

第五十八條

現在既定ノ租稅及將來ニ經常稅トシテ定ムベキ租稅ハ更ニ他ノ法律ヲ以テ之ヲ變革セザル限ハ毎年一定ノ稅率ニ依リ之ヲ徵收スベシ

(參照)

普 百九條 現行ノ租稅ハ法律ヲ以テ變更スル迄ハ之ヲ徵收ス

乙案 試草

本條ハ第十條ニ從ヒ
重復スルハ存シ
タテ取ルハ後
日ノ取ルハ後
ガ爲ナリ

右普國ノ百九條ハ歐洲ニ於テ憲法ノ特別ノ性質トシテ看ル所ナリ葡國ハ稍ヤ此意ヲ櫛括シテ之ヲ用キタリ即チ左ノ如シ

葡 百三十七條 國債ノ利子並ニ其整理ニ充ツベキ租稅ヲ除クノ外凡直稅ハ每年國會ニ於テ之ヲ規定スベシ然レドモ直稅ハ之ヲ廢止シ若クハ新法ニ由テ變改スルニ非ザレバ舊ニ仍テ之ヲ存ス

租稅ハ每年之ヲ議會ニ付シ租稅ニ係ル法律ノ効力ハ一年ニ限ルノ旨ヲ掲ゲタルハ佛國ヲ祖トシ白國及其他ノ各國槩ネ此意ニ倣フ

佛 千七百九十一年ノ憲法 第五章一條 租稅ハ每年立法院ニ於テ之ヲ議決シ翌年ノ會議ノ末期ヲ限リ其効力ヲ失フ但シ同案ヲ再決シタルトキハ例外トス

佛 千八百十五年ノ憲法 三十四條 地稅家稅ヲ問ハズ總テノ直稅ハ一箇年ニ限リ之ヲ決議シ不直稅ハ數年ノ爲ニ決議スルヲ得ベシ。議院ヲ解散スルノ時ニ於テハ新ナル議院ノ集會スル迄ハ續イテ他ノ集會ニ於テ已ニ決議シタル租稅ヲ徵收スベシ 〔佛國ニ於テ毎年ノ議決ヲ以テ稅率ヲ増減シタルハ地租人頭稅門窓稅營業稅トノ四種トス然ルニ實際ニ於テ近時ハ其稅率ハ動カサルヲ常トスト云〕

白 百十一條 國稅ハ每年之ヲ公議ス國稅ヲ定ムルノ法律ハ其力ヲ有スルコト一年ニ限ル同案ヲ再用シタルトキハ此例ニアラズ

瑞典 六十一條 前款ニ載スル所ノ各目ヲ以テ可決シタル所ノ諸稅ハ其年度ノ終迄之ヲ徵收シ而シテ其年度中ニ議院ニ於テ再ビ之ヲ規定スベシ

丁 四十九條 豫算法ノ決定ノ後ニ非ザレバ租稅ヲ徵收スベカラズ豫算法及追加費額ニ於テ許可セザル限リハ一ノ國財ヲ費用スルコトヲ得ズ 〔英國ニ於テハ所得稅ヲ除ク外大率經常稅タルコト佛ノ不直稅ニ同ジ所謂固定資金ナル者ナリ〕

英國以下ハ別項ニ寫セ

第五十九條

地方ノ費用ニ充ル租稅ハ特ニ定メタル法律ノ限内ニ於テ各地方議會ノ議ヲ取り之ヲ徵收スベシ 法律ハ已ムヲ得ザル場合ニ於テ地方議會ノ議決ニ依ラズシテ之ヲ徵收スルヲ得ベキ特例ヲ定ムベシ

參照

白 百十條第二項三項 州稅ハ州會ノ承諾ニ非ザレバ之ヲ定ムルコトヲ得ズ 邑稅ハ邑會ノ承諾ニ非ザレバ之ヲ定ムルコトヲ得ズ州稅邑稅ニ付テ其經驗ニ據リ已ムコトヲ得ザル費用ヨリ生ズル除外特例ハ法律之ヲ定ム

境

千八百六十七年 州制憲法二十二條 州庫通常ノ歳入充足セザル時ハ州會ハ州ノ所有地金庫及建物ニ須要ナル財本ヲ得ルノ方法ヲ評議決定ス

是事ニ付キ州會ハ直地稅百分ノ十二至ル迄ノ副稅ヲ課スルコトヲ議決スルヲ得直稅及其他ノ一般ノ租稅ニ於テ此ノ制限ヲ越エタル副稅ヲ課スルニハ皇帝ノ制可ヲ必要ト爲ス

荷

百二十九條 州會ハ每歲其國務ノ内ニ入ルベキ地方務ノ支費ヲ王ニ上奏シ王之ヲ准允スルトキハ國ノ豫算ニ記入セシム

每年各州ニ於テ作ル所ハ專各州ニ屬スル歳出入豫算ハ王ニ上奏シテ制可ヲ受クベシ州費ニ供スル州ノ租稅ハ王ニ上奏シ法律ニ由テ准許ヲ受クベシ

同

百四十二條 邑稅ノ制立變更及廢止ヲ掲グタル邑治ノ決定ハ邑會ノ州會ニ通知シ州會ハ之ヲ王ニ上奏シ王ノ准許ヲ經ザレバ施行スルコトヲ得ズ

法律ハ邑稅ニ係ル一般ノ規則ヲ定ム

邑稅ハ邑ノ運輸出入ニ妨害ヲナスコトヲ得ズ

同

百四十三條 法律ハ又邑ノ豫算及決算ノ規則ヲ定ム

第六十條

歳出歳入ノ定額ハ毎年豫算表ヲ制定シ兩議院ノ承認ヲ經テ之ヲ公告スベシ

參照

獨

六十九條 帝國ノ歳入歳出ハ毎年之ヲ公布シ豫算表ニ記載ス此豫算表ハ年度ノ始ニ於テ此下ニ記載スル規則ニ循ヒ一ノ法律ニ由テ之ヲ定ム

普

九十九條 國ノ歳入歳出ハ豫メ計算シテ豫算表ニ記載スルヲ要ス豫算表ハ毎年一ノ法律ニ由リ之ヲ定ムルヲ要ス

白

百十五條 毎年兩院ハ會計ノ決算ヲ檢定シ豫算ヲ議決ス國ノ一切ノ入額及出額ハ必ズ豫算表及決算表ニ登載スルヲ要ス

西

七十四條 政府ハ每歲翌年ノ國費豫算及國費ヲ支ユベキ資本ノ既算ヲ國會ニ提出スベシ同時ニ租稅ノ徵收及其費出ノ報告書ヲ國會ニ送り其檢査ト承認ヲ受クベシ

西

十五條 政府ハ國會ノ開會ヨリ八月以内ニ前年ノ決算表及翌年ノ豫算表ヲ代議士院ニ送付スベシ(豫算決算送付ノ期ヲ定メタル者ハ西葡二國是ナリ葡ハ開會ヨリ十五日

内ニ豫算ヲ送り一月内ニ決算ヲ送ル)

葡

百三十八條 大藏大臣ハ他ノ大臣ヨリ各省ノ支費ノ豫算ヲ交換シ國會ノ集合スルトキニハ每歲代議士院ニ向テ前年ノ國庫出納ノ決算ノ總計及來年ノ國費並ニ租稅及入額

ノ總計ヲ提出ベシ

荷 百十九條 王國ノ出納豫算表ハ法律ヲ以テ之ヲ決定ス

同 百二十條 豫算表ニ關スル法律ノ議案ハ每歲該豫算表ニ係ル年度ノ始ニ國會ノ通常

會開會ノ後即時ニ王ノ名ヲ以テ第二院ニ提出ス

豫算ヲ以テ一ノ法律トスルハ大抵各國ノ同キ所ナリ而シテ近來憲法學者ノ論ニ豫算ハ行政事

務ニシテ議院ノ認可ヲ受クルニ止マリ法律ト同一ノ類ニ非ズト云其說別ニ具フ

第六十一條

格別ノ時宜ニ因リテハ七年ヨリ長カラザル時間ヲ期シテ數年ノ繼續費ヲ議決スル事ヲ得ベシ

(參照)

豫算表ヲ以テ毎年調製シ及議院ニ付スルハ各國ノ同キ所ナリ但シ或ル國ニ於テハ左ノ變例ヲ

用ユルアリ

獨 七十一條 帝國ノ入費額ハ通例一年ノ爲ニ可決ス然レドモ格別ノ場合ニ於テ一年ヨ

リ長キ時間ノ爲ニ可決スル事ヲ得ベシ

又ヴユルテシベルグノ憲法ハ通常三年ヲ一期トス其百十二條ニ云

國會ノ承認ヲ得タル國費ノ豫算ハ常ニ三年間其効力ヲ有ス

第六十二條

帝室費及特別ノ法律ヲ以テ定メタル歲出歲入又ハ法律ニ依リ政府ノ義務ニ於テ必要ナル歲出

ハ之ヲ豫算ニ掲グルモ毎年決議スルノ限ニ在ラズ

歲出ニ係ル現在既定ノ命令ハ總テ法律ノカアル者トシ本條ニ準スベシ

(參照)

佛 千七百九 第五章二條 國債ノ償却及國王經費ノ支拂ニ要用ナル金額ハ何等ノ口實ア

ルモ承諾ヲ拒ミ及停止スル事ヲ得ズ

獨逸憲法兵力部第六十二條末項ハ「軍隊豫算ノ決定ハ帝國軍隊ノ憲法上ノ組織ヲ以テ基礎ト

スベキコト」ヲ掲ゲタリ是レ亦豫算ヲ以テ法律ヲ制限セズシテ法律ヲ以テ豫算ヲ制限スルノ一

例ナリ

第六十三條

豫算ノ各款ニ就テ兩議院ヲ經タル者ハ流用ヲ許サズ其各項ハ勅令ヲ以テ流用ヲ許スコトヲ得

(參照)

荷 百二十一條 歲出豫算ノ每章ニハ專一省ニ關スル支費ヲ載ス

各省ヲ以テ或ハ一箇ノ法案トナシ或ハ數箇ノ法案トナス法律ハ此章ヨリ彼章ニ流用ス

ル事ヲ認許スルヲ得

佛 千八百五十二年十二月二十五日元老院決定書十二條

經費豫算ハ行政各局ニ於テ章及條ヲ分チ之ヲ議院ニ提出スベシ

豫算ハ各省毎ニ之ヲ決議ス

各省ノ爲ニ付豫シタル經費ヲ各章ニ分配スルハ參議院ニ於テ下シタル皇帝ノ勅令ヲ以テ之ヲ定ムベシ

同上ノ法式ニ從ヒタル別段ノ勅令ハ一章ヨリ他ノ一章ニ流用スル事ヲ許スヲ得

其他各國ニ在テハ豫算議決ノ法並ニ流用ノ事ヲ以テ憲法ニ掲載スルモノアルヲ見ズ

第六十四條

兩議院ニ於テ豫算ヲ議決セザルトキハ政府ハ前年ノ豫算ニ依リ之ヲ施行スベシ

(參照)

西 追加憲法七條 若シ歲計豫算法ニ付立法兩院ノ間ニ協議ヲ得ザル時ハ前年ノ豫算法ヲ適用スベシ

第六十五條

歲出入ノ決算ハ毎年會計検査院ノ審査報告ヲ併セ兩議院ニ付シ其承認ヲ經テ之ヲ完結ス

(參照)

佛 千七百九十一年 二百條 各省支費ノ詳細ナル決算書ハ各省大臣或ハ會計長官ニ於テ署名證明シタル後議院開會ノ初ニ印刷シテ之ヲ公布スベシ。諸税及一切ノ歲入ノ收納表モ亦同様ナルベシ

白

百十五條 毎年兩院ハ決算ノ法律ヲ定シ及豫算ヲ議定ス

國ノ一切ノ歲入歲出ハ總テ豫算表及決算ニ記載スルヲ要ス

同 百十六條 國計ノ大決算ハ會計検査ノ注明ヲ併セ兩院ニ付ス

普 百四條二項 國計ノ決算ハ會計検査院ニ於テ之ヲ檢勘シ及決定ス。毎年國計ノ大決算ハ會計検査院ヨリ國債ノ部ニ注明ヲ加ヘ議院ニ付スベシ

荷 百二十二條 每歲ノ歲入歲出ノ決算ハ會計検査院ニ於テ承認シタル簿冊ニ併セ立法官ニ附ス

決算ノ完済ハ法律ニ由リ之ヲ決定ス

第六十六條

已ムヲ得ザルノ情狀ニ由リ一歲ノ支費豫算ニ超過シタルカ、又ハ歲入其豫定ノ額ニ充タズシテ更ニ補充費ヲ支出シタルトキハ次年ノ開會ニ於テ之ヲ再議院ニ報告シ其承認ヲ求ムベシ

(參照)

普 百四條 豫算ノ超過ニ向テハ兩院ノ後認ヲ要ス

第六十七條

會計検査院ハ會計出納ヲ監視シ毎年ノ決算ヲ検査ス
會計検査院ノ編制及權限ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(參照)

白 百十六條 會計検査院ノ官員ハ代議士院之ヲ撰任シ法律定ムル所ノ任期ニ從ヒ代任
ス 一任
六年

會計検査院ハ行政全局ノ決算及國庫ヨリ支出スルノ一切ノ會計ヲ検査完済スルニ任ズ
該院ハ豫算表ノ支費ニ向テ一條ノ過費アラザルカ又ハ一ノ流用モアラザルカヲ監視ス
該院ハ行政各部ノ決算ヲ決定シ一切ノ證據一切ノ要用ナル文票ヲ拾收スルニ任ズ
國ノ大決算ハ會計検査院ノ注明ヲ併セ兩院ニ付ス
會計検査院ノ構制ハ一ノ法律ヲ以テ定ム

普 百四條四項 別法會計検査院ノ構制及權限ヲ定ム
荷 百七十六條 會計検査院ノ構制及權限ハ法律ヲ以テ定ム

國王ハ國會ノ第二院ヨリ上奏スル三員ノ候撰人姓名表ニヨリ會計検査院ノ缺員ヲ撰任
ス

第六十八條

會計検査院ノ官員ハ終身職ニ任ズ其俸給ハ法律之ヲ定ム
兩議院ノ承認ヲ經ザレバ國債ヲ起シ及國庫ノ負擔ニ係ル政府ノ保證ヲ與フル事ヲ得ズ

(參照)

獨 七十三條 非常ノ需要アル場合ニ於テハ帝國ノ法律ヲ以テ國債ヲ命ジ又ハ帝國ノ負
擔ヲ以テ保證ヲ與フルコトヲ得

普 百三條 法律ニ由ルニ非ザレバ國債ヲ起スコトヲ得ズ

國ノ負擔タルベキ保證ニ於テモ亦之ニ同ジ

瑞典 七十六款 王ハ議院ノ准允ヲ得ルニアラザレバ内外ニ於テ負債ヲ約スルコトヲ得
ズ又ハ新ナル公債ヲ以テ國ノ負擔トナスコトヲ得ズ

(大藏省ハ立案ハ此ニ附載シテ參考ニ供ス)

大藏省立案

- 第條 凡ソ租税ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム
- 第條 現行ノ租税ハ舊ニ依テ徵收ス
- 第條 租税ハ特免アルコトナシ
- 第條 歳入歳出豫算ノ額ハ總テ之ヲ豫算法案ニ掲載ス
- 第條 特別ノ法律ヲ以テ定メタル歳入歳出ハ毎年ノ決議ヲ要セズ其他ハ必ず毎年法律ヲ以テ之ヲ定ム
- 第條 歳出ノ豫算法案ハ之ヲ款項ニ分チ各款ニ就テ決議ス
- 第條 毎年國會開會ノ際會計検査院ノ審査ヲ經タル前年度ノ歳計決算ヲ兩院ニ報告ス
- 第條 會計検査院ノ職務權限ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム
- 第條 實費豫算ニ超過スルトキハ兩院ノ後認ヲ要ス
- 第條 凡ソ國債ノ募集ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム
- 第條 毎年國債元利ノ仕拂ニ充ツベキ金額及ビ監督ノ法ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム
- 第條 國債償却ノ義務ハ其債主ニ對シテ保固トス
- 第條 地方ノ制度ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム
- 第條 地方ノ歳計ハ別段ノ法規ニ從ヒ地方會議ニ於テ之ヲ決議ス

第七章 軍 兵

第 條

凡ソ日本國民ハ兵役ニ服スルノ義務ヲ負フ

(參照)

本條モ第十條ト重シク取捨存

- 獨 五十七條 凡ソ獨逸人ハ兵籍ニ入ルノ義務アリ代人ヲ以テ其義務ヲ行フコトヲ得ズ
- 普 三十四條 兵役ハ普國民ノ義務トス此ノ義務ノ範圍及種類ハ法律之ヲ定ムベシ
- 荷 百七十七條 國民最要義務ノ一ハ國家ノ獨立邦土ノ防禦ノ爲ニ兵器ヲ執ルニ在リ
- 西 三條 凡ソ西班牙國人ハ法律ニ從ヒ徵集セラレタルトキハ本國ヲ防禦スル爲ニ兵器ヲ執リ及國州邑ノ費ニ對シ其所得ノ比例ニ從ヒ納税スルノ義務ヲ負フ
- 葡 百十三條 凡ソ葡萄牙國人ハ王國ノ獨立完全ヲ保チ及内外ノ寇敵ヲ防禦スル爲ニ兵役ニ服スルノ義務アリ
- 丁 九十條 凡ソ兵器ヲ帶ルニ堪ユル者ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ各人本國ノ防禦ニ從フベシ

瑞士 十八條 凡ソ瑞士人ハ兵役ニ服スベ
ハウエル 九章第一款 凡ソ國民ハ法章ニ從
フ國ノ防禦ニ從フヲ以テ其ノ義務ト

第六十九條

徵兵ノ方法ハ法律ノ定ムル所ニ依ル
平時ニ於テ毎年徵員ノ時ハ現時ノ定額ヲ増加スルトキニ限り之ヲ議院ノ議ニ付スベシ
戰時ニ於テ國民軍ヲ徵集スルハ勅令ニ依ル

(參照)

英 千六百八十九年一條六項中 王國ニ於テ平時軍兵ヲ徵集スルハ議院ノ承諾ヲ受ルニ非
二月十三日法律

ザレバ法律ニ背反スルモノトス

白 百十八條 徵兵ノ方法ハ法章ヲ以テ之ヲ定ム武官ノ昇進權利義務モ亦法章ヲ以テ定

ム

普 三十四條中 兵役ノ期限及規程ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(佛ト西トハ憲法ニ明文ナシト雖現行徵兵法ハ皆法律ヲ以テ之ヲ定メタリ)

以上各國ハ憲法ニ於テ法律ヲ以テ徵兵ノ規程ヲ定ムベキコトヲ示シタル者ナリ其他憲法ヲ以
テ兵役ノ期限又ハ徵充ノ方法ヲ定メタル者アリ即チ左ノ如シ

獨

五十九條 凡ソ兵役ニ堪フ可キ獨逸人ハ一般ノ成規ニ從ヒ七年間即チ滿二十歳ヨリ

滿二十七歳迄ハ常備兵役ニ服スベシ其役期七個年ヲ分テ前三個年ヲ常備現役トシ後四
個年ヲ豫備役トシ仍五個年間後備役ニ屬スベシ

荷 百八十九條 法律ハ民兵及國民兵ノ數額及編制ヲ定ム

(第二項參照)

各國ニ於テ毎年ノ徵員ハ或ハ毎年ノ議ニ付シ或ハ其増減ノミヲ議セシメ又ハ期ヲ定メテ議決
セシム其例左ノ如シ

白 百十九條 徵員ハ毎年國會ニ於テ之ヲ議定ス○徵員ヲ定ムルノ法律ハ其力ヲ有スル

コト一年ニ限ル(ルーマニ一國此文ニ同ジ)

西 八十八條 國會ハ毎年國王ノ發議ニ依リ陸海軍ノ常備兵數ヲ定ム

伊 七十五條 陸軍ノ點徵、法律之ヲ定ム

以上諸國ハ點徵ノ員數ヲ以テ毎年議ニ付スルコトヲ明記スル者ナリ

(英米佛ハ明文ナシト雖現ニ毎年徵員ヲ決定スルノ權ハ國會ニ在リ)

葡 百十四條 國會ニ於テ陸海軍ノ兵員ノ常備員ヲ定メザルトキハ其之ヲ増加又ハ減少
スル迄現在ノ通タルベシ

獨 六十條 本年千八百七十一年十二月三十一日後平時陸軍ノ員數ハ帝國ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム

ベシ(七十四年ノ憲法ハ五年ヲ一期トシ八十年ノ憲法ハ七年ヲ一期トシ之ヲ決定セリ)

六十二條 陸軍豫算表ハ此ノ國憲ニ定メタル陸軍編制ノ方法ヲ以テ之ヲ決定スベシ

荷ト獨トノ二國ハ其變例ヲ行フ者ナリ

(第三項參照)

普 三十五條第二項 戰時ニ於テ國王ハ法律ニ循ヒ國民軍ヲ起發スルコトヲ得

第七十條

陸海軍ノ編制ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

(參照)

獨 (七十一年)六十一條第二項 聯邦陸軍ノ編制統一シタル後憲法ノ增補トシテ全獨逸

ノ陸軍法律ヲ帝國兩議院ニ下付シ其決定ヲ求ムベシ其後七十四年五月二日法律ヲ發シテ陸軍組織ヲ定メタリ

(西國佛國白國ハ憲法中ニ明文ナシト雖モ現ニ法律ヲ以テ軍隊ノ編制ヲ定メタリ)

以上各國ハ軍隊ノ編制ヲ以テ之ヲ議院ノ議ニ付スル者ナリ

葡 百十七條 陸軍及海軍ノ編制昇級俸給規律ハ特別ノ勅令ヲ以テ之ヲ定ムベシ

右勅令ヲ以テ編制ヲ行フ者ナリ

蓋葡國ヲ除ク外、陸軍ノ編制ハ各國皆法律ヲ以テ之ヲ定メタリリユクサンビユル盧克山堡國千八百六十八年ノ

憲法第七章第九十六條ニ云凡ソ兵力ニ關ル事件ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムト此レ凡ソ兵制ヲ必法律ニ依ルコトヲ明言シタル者ニシテ尤概括ノ意ヲ顯ス者ナリ

第七十一條

外國ノ軍隊ハ法律ニ據ルニ非ズシテ日本國ノ軍役ニ從事シ及日本國ノ土地ニ屯駐シ又ハ經過

スルコトヲ許スコトヲ得ズ

(參照)

白 百二十一條 外國ノ軍隊ハ法律ニ據ルニ非ズシテ白耳義國ノ軍役ニ從事シ及白耳義

國內ニ屯駐シ又ハ經過スルコトヲ許スコトヲ得ズ

ルーマニー 百二十三條 白耳義ニ同ジ

荷 百十九條 外國兵ヲシテ王國ノ軍役ニ從事セシムルハ國王ト國會ト共ニ之ヲ認許シ

タル時ニ限ル

千七百九十五年佛憲二百九十五條 何レノ外國兵モ民選議院ノ承諾ヲ受ケシ後ニアラザレ

ハ佛蘭西國領地ニ入ルコト能ハズ千八百四十八年ノ憲法亦此意ニ同シ

第七十二條

常備軍隊ハ法律ニ定ムル時機ニ於テ文衙ノ請求ニ由リ内亂ヲ鎮壓シ及法律ヲ施行スル爲ニ之ヲ用ユルコトヲ得ズ

(參照)

三十六条 軍隊ハ法律ニ定ムル場合ニ於テシ法律ニ定ムル規程ニ循ヒ文衙ノ請求ニ

由ルヲ除クノ外内亂ヲ鎮壓シ及法律ヲ施行スル爲ニ之ヲ用ユルコトヲ許サズ法律ハ文

官請求ノ場合ヲ定ムベシ

バツイエル 第九章六條 軍隊ハ外敵ヲ防グ爲ニ備フル者タリ當該文官ヨリ正當ノ規程

ニ循ヒ請求シタル場合ニ非ザレバ内寇ノ爲ニ之ヲ用ユベカラズ

千七百九十一年佛憲 百九十一條 國ノ安寧ノ爲ニ外敵ニ對シ用フベキ所ノ國兵ノ諸分

隊ハ國王ノ命令ヲ受テ運動スベシ

百九十四條 國內ニ於テ國兵ノ運動ヲ請求スルコトハ文官專ラ之ヲ爲スベシ但民選議院ニ

於テ定メタル法律ニ循フベシ

第七十三條

軍隊ハ服務ノ内外ヲ論ゼズ多衆議事スルコトヲ得ズ命令ニ由ラズシテ集會スルコトヲ得ズ

軍隊ハ政談演說ヲ爲シ及參會シ又ハ政事ノ意見ヲ建白スルコトヲ得ズ

(參照)

三十八條 軍隊ハ勤務上ニ於テスルト勤務外ニ於テスルト問ハズ衆議スルコトヲ

得ズ命令ナクシテ集會スルコトヲ得ズ

後備軍ノ集會又ハ結社シテ軍制及兵役ノ命令及事件ヲ議スル者ハ其召集中、在ラザル

モ之ヲ許サズ

千七百九十一年佛憲 百九十六條 凡國兵ハ命令ニ從フベキ者ナリ何レノ軍隊モ議事ヲ

ナスベカラズ其後ノ憲法皆
此意ニ依ル

第七十四條

戰時又ハ内亂ニ當リ全國又ハ國ノ或ル部分ニ向テ戒嚴ノ令ヲ公布スルハ勅令ニ由ル

法律ハ戒嚴ノ節目及合圍ノ地方ニ限リ軍隊司令官ニ委任スル處分ノ場合ヲ定ム

(參照)

六十八條 聯邦ノ安寧ヲ侵スコトアルトキハ皇帝ハ聯邦ノ或ル部分ニ向テ戒嚴ヲ布

告スルコトヲ得 帝國法律ヲ以テ戒嚴公布ノ場合程式及效果ヲ定ムル迄ハ千八百五十

一年六月四日ノ普國ノ法律ニ循行スベシ(戒嚴ノ事ヲ以テ軍兵ノ章ニ列シタルハ獨リ

獨逸憲法ノミ然リトス)

乙案 試草

普

百一十一條 内外戦亂危險ノ日ニ當テハ建國法ノ第五條人身自由第六條住居不侵第七條裁判受於テスルノ條著刻言論第二十七條第二十八條自由條第二十九條第三十條集會結社第三十六條常備兵内用テ爲サハ機宜處分ヲ要スルノ時間及其地方ニ在テ法律ノ力ヲ失ハシムルコトヲ得

千八百五十一年六月四日ノ戒嚴法第十條

憲法第七條ヲ停止シテ軍事裁判所ヲ設ケタルトキハ此裁判所ニ於テハ謀反大逆謀殺一揆抗拒鐵道電信ノ損壞劫囚暗殺強盜掠奪兵卒ヲ上官ニ背カシムルコト及第八條第九條ノ犯罪ヲ裁判スベシ但此等ノ犯處ハ戒嚴ヲ公告シタル後ニ犯シタルカ又ハ經續シテ犯シタル者ニ限ルベシ

内閣ヨリ憲法第七條ノ停止ヲ爲シタルトキニ非ザレバ平時ニ於ケル戒嚴裁判執行ハ内閣ニ於テ停止ヲ認可スルマデハ之ヲ中止スベシ

第十七條 戒嚴ヲ爲シタルト否トニ拘ハラズ(第五條第十六條)憲法ノ箇條ヲ停止シタルニ付テハ其一條ヲ停止シタルモ議院ニ直チニ又ハ次會ニ於テ報告スベシ

千八百十五年佛憲 第六十六條 外敵侵攻シ或ハ内亂アル場合ノ外何レノ要塞及土地ニモ戒嚴令ヲ公告スベカラズ外敵侵攻セシ場合ニ於テハ政府ノ命令ニ由リ之ヲ公布ス但内亂ノ場合ニ於テハ法律ニ由テノミ之ヲ公布スベシ此場合ニ於テ若シ上下院集會中ニアラ

ザルトキハ政府ノナシタル命令ハ兩院集會ノ後十五日間ニ法律ノ議案トナスベシ

千八百四十八年佛憲 百六條 法律ヲ以テ戒嚴ヲ布告スベキ場合及其布告ノ程式ト效力ヲ定ムベシ(此法律ハ千八百四十九年八月九日ニ至リ之ヲ定メタリ此法律ニ據レバ國會ハ獨戒嚴ヲ布告スルコトヲ得國會閉止ノ時ニ於テハ大統領ハ參議院ノ意見ヲ取り戒嚴ヲ布告シ重大ナル場合ニ於テ特ニ國會ヲ召集ス但タ城塞ニ在テハ陸軍司令官戒嚴ヲ宣告スルコトヲ得ルノミ

第七十五條

陸軍及海軍裁判ハ陸軍及海軍刑法ニ依リ專軍人軍屬ノ刑事ノ犯人及軍法ノ犯者ヲ處分ス

(參照)

普 三十七條 軍法裁判ハ專刑事ノ犯者ヲ處分ス其組織ハ法律之ヲ定ム

軍隊ノ紀律ハ勅令之ヲ定ム

千七百九十一年佛憲 百九十七條 陸海軍兵及國兵ハ裁判ノ程式及軍事犯罪ノ處分ニ就

テ格別ノ法律ニ循フベシ

千八百十五年佛憲 五十四條 軍律ニ管スル輕罪ノミ軍事裁判所ノ管轄ニ歸ス

五十五條 總テ他ノ輕罪ハ假令軍人ノ犯者ト雖モ平常裁判所ノ管轄ニ歸ス

三條 軍法院ノ權任ハ法律之ヲ定ムベシ
 白 百五條 法律ヲ以テ軍法司ノ構制及權任軍法官ノ權務及任期ヲ定ム
 瑞 二十條 軍事裁判所ニ於テ判斷シタル按件ヲ國王ノ檢査ニ供スルトキハ戰時ニ非ザルヨリハ之ヲ大法院ニ附シテ決斷セシムベシ其爲ニ國王ハ特ニ高位武官二員ヲ選ンデ此事ニ參與セシムベシ此武官ハ他ノ法官同様ニ其責ニ任ジ特恩ヲ仰ガズシテ大法院ニ出席シ判斷ニ參與スベシ法官ノ員數ハ八人ニ過グベカラズ○戰時ニ方テハ上ノ按件ヲ決定スルニ全ク軍律ニ依ルベシ
 荷 百四十六條 軍事裁判及護郷兵裁判モ亦法律ヲ以テ之ヲ定ム

第八章 總則

第七十六條

法律及命令ヲ以テ施行スル條則ハ法律上ノ公式ニ依リ發布シタルニ非ザレバ其效力ヲ有セズ
 (參照)
 白 百二十九條 法律若クハ行政ノ命令規則若クハ州及ビ邑ノ規則ハ法律ヲ以テ定メタル公式ニ從テ發布シタル後ニ非ザレバ必由ノ義務トナラズ

普 百六條 法律ニ示シタル公式ニ循テ發布シタル法律及命令ハ人民必由ノ義務トナル
 公式ニ循ヒ發布シタル命令ノ法トナスベキ乎否ヲ檢査スルハ行政部官ニ屬セズシテ兩院ニ屬ス

第七十七條

命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ズ
 (參照)
 本條ハ各國ノ憲法ニ未ダ明文ヲ掲グルヲ見ズ但シグナイスト氏ノ英國行政法ヲ説クハ實ニ此ノ一語ヲ以テ英國ノ法律發達ノ元則トセリ而シテ瓦敦堡ノ憲法第八十八條ハ稍ヤ本條ノ意義ニ近シ其文左ノ如シ
 國會ノ承認ヲ經ルニ非ザレバ何等ノ法律モ之ヲ記載シ廢止シ改正シ又ハ公正ノ説明ヲ爲スコトヲ得ズ

第七十八條

此ノ憲法ヲ公布スル前ノ太政官布告及命令其一般及永久ノ爲ニ發布シタル者ニシテ此憲法ニ矛盾セザル者ハ法律規則條例又ハ何等ノ名義ヲ用キタルニ拘ラズ更ニ新法ヲ以テ之ヲ改正スルニ至ル迄ハ總テ將來ニ遵行ノ力アル者トス

本項ハ第二條ニ於テ被重ニキ案ヲ取ルハ此條ニ廢ス

(參照)

普 百九條第二項 此ノ憲法ニ矛盾セザル諸般ノ成典別法及命令ノ條々ハ一ノ法律ヲ以テ廢止セザル限ハ將來ニ效力ヲ有ス

佛 千八百四十八年 百十二條 現在ノ成典法律規則ノ條々此ノ憲法ニ矛盾セザル者ハ法律ヲ以テ之ヲ廢止セザル限リハ將來ニ施行ス

白 百三十八條 憲法施行ノ日ヨリ起リ憲法ニ矛盾シタル一切ノ法律命令指令規則及其他ノ文書ハ總テ之ヲ廢ス

第七十九條

將來此ノ憲法ノ條項ヲ修正スルノ必要アルニ至ラバ上諭ヲ以テ議案ヲ下付スベシ

兩議院ハ其全員ノ三分ノ二以上出席シ而シテ出席員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニ非ザレバ修正ヲ議定スルコトヲ得ズ

(參照)

佛 千七百九十一年 二百三條 憲法會ハ國民己レノ憲法ヲ修正スルノ權ハ限リナカル可キコトヲ宣告ス憲法ノ中經驗ヲ得テ障得ヲ顯ハセシ條々ヲ修正スルニ憲法ニ定メタル程式ヲ以テ之ヲ爲スハ國民ノ利益ナリト判セシガ故ニ左ノ程定ヲ以テ修正會ニ於テ改正ヲ爲サ

シムベキコトヲ定ム

白 百三十一條 立法權ハ憲法某々ノ條ノ改正ヲ宣告スベシ

此宣告ノ後兩議院ハ當然ニ解散ス

更ニ第七十一條ニ從ヒ新ニ兩議院ヲ招集ス

新徵ノ兩議員ハ王ト協同シテ改正ノ條件ヲ議定ス

此場合ニ於テハ各院ヲ組織スル議員少クトモ三分ノ二出席セザル時ハ議事ヲ開クヲ得ズ而シテ其投票少クトモ三分ノ二以上ニ充タザレバ改正ヲ承認スルヲ得ズ

普 百七條 憲法ハ法律ヲ制定スル通常ノ方法ヲ以テ修正スルヲ得ベシ但シ兩議員ハ全勝ノ多數說アルヲ要ス而シテ再次ノ投票ハ少クトモ二十一日ノ時間ヲ經ルヲ要ス

バツイエール 第十章七條 憲法ハ國會^{上下}兩院ノ承諾ナクシテ修正増補スルヲ得ズ而シテ修正増補ノ議案ハ國王獨リ之ヲ提出シ國會ハ其提出ノ議案ニ就テ議事ヲ行フ但シ其ノ

議決ハ各院ノ議員四分ノ三以上ノ出席アリテ三分ノ二以上ノ多數說アルヲ要ス

荷 百九十六條 根本法修正ノ議案ハ明ニ修正案ヲ示ス

法律ハ其議案ヲ審議スベキ旨ヲ宣告ス

同 百九十條 此法律ノ公告ノ後兩議院ハ解散ス新選ノ兩議員ハ此議案ヲ議シ議員三分

ノ二以上ノ投票ヲ以テ此法律ヲ提出シタル修正ヲ承認スルヲ得ベシ

同 百九十八條 攝政政ヲ攝スル時ハ根本法又ハ繼嗣ノ順序ヲ變改スベカラズ

同 百九十九條 王及ビ國會ノ決定シタル根本法修正ノ箇條ハ公式ニ從テ發布シ根本法ニ合併スベシ

丁 九十五條 現在ノ憲法ニ入ルベキ増補及改正ノ箇條ニ關ル議案ハ國會^{上下}兩院ノ通常會及臨時會ニ提出スルヲ得ベシ

根本法ノ新條ニ關ル議案兩議院ノ認定スル所トナリテ政府ヨリ效力ヲ與ヘント欲スル時ハ國會ヲ解散シ更ニ兩院ノ爲ニ議員ヲ選舉スベシ新條ノ國會ノ通常會又ハ臨時會ニ於テ變改ナク再タビ承認シ王之ヲ裁可シタル時ハ其條ハ法律タルノ效力ヲ得ベシ

米 五條 國會ハ兩院議員三分ノ二以上憲法ノ修正ヲ必要ナリトスル時ハ又ハ各州立法府ノ三分ノ二ヨリ請願スル時ハ民會ヲ招集シテ修正ノ議案ヲ發スベシ此議案ハ國會ノ定ムル所ニ從ヒ各州ノ立法府ノ四分ノ三或ハ其各州立法府ヨリ出タル民會ノ四分ノ三以上ノ批准ヲ得ル時ハ法律タルノ效力ヲ生ジ憲法ノ一部トナルベシ

甲案試草正文

別本ニロエスレル、モスセ兩氏ノ答議ヲ附スル者、其觀覽ニ便ナラザルヲ以テ、正文謄本一通ヲ具フ。兩本俱ニ均シク甲案ニ係リ異令アルニ非ズ。

朕

祖宗ノ遺烈ヲ承ケ、萬世一系ノ帝祚ヲ繼ギ、朕ガ親愛スル所ノ臣民ハ即チ朕ガ
 祖宗ノ惠撫慈美シ玉ヒシ所ノ臣民ナルヲ思ヒ、其康福安寧ヲ保護シ其懿德智能ヲ自由ニ自由ニノ三字ヲ削
ルベ發達セシメンコトヲ願ヒ、又宇内變遷ノ世運ニ當リ、往古來今ノ大勢ヲ察シ、我臣民ト俱ニ
 文明ニ進ムノ必要ヲ認メ諸般ノ法律ニ付キ臣民ニ諮詢スルノ便ヲ廣メンコトヲ欲シ、乃明治元
 年月日十四日ナランノ誓文及明治十四年十月二十四日ノ詔命ヲ履踐シ、茲ニ大命ヲ下シ、首メニ國土
 國民ノ分義ヲ示シ、次ニ上下議院ノ組織權限ヲ定メ、又行政司法諸部及諸般ノ制置ヲ條舉シ、各
 々踰ユベカラザルノ範圍ヲ明確ニシ、以テ建國建國ノ二字除クヘシ根本ノ大典トシ、朕ガ子孫及臣民タル
 者ヲシテ永遠ニ循守スル所ヲ知ラシム。

國ノ主權ハ國ノ大政ヲ立法行政
ノ大權トセバ奈何朕ガ之ヲ

祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ。朕及朕ガ子孫ハ將來此憲法ニ循由シ、各大臣ノ補弼ニ
 依リ之ヲ施行シ、及施行セシメントス。兩議院ヲ召集シ開閉シ既ニ開キタル議會ヲ中止シ又ハ
 解散スルハ總テ朕ガ詔命ニ依ル。法律ヲ公布シ法律ヲ施行スル爲及國ノ安寧秩序ヲ保持スル爲
 メニ必要ナル命令ヲ下附シ、又ハ下附セシメ文武ノ官制及俸給ヲ定メ、官吏ヲ任免シ、爵位勳
 ヲ叙授シ、陸海軍ヲ統率シ、及編制シ、兵役ヲ徵募シ、外國ト戰爭ヲ宣告シ、和平ヲ講盟シ、

交際ノ條約ヲ締ビ及交際スルハ總テ朕ガ攬ル所ノ大權ナリ。

上下議院上下議院以下時間ヲ誤
ラザシムベシ迄ヲ削リハ二十三年ノ冬期ヲ以テ之ヲ開キ、二十四年度ノ豫算ヲ議スルニ適
 當ノ時間ヲ誤ラザラシムベシ。開會以後此ノ憲法ニ依リ上下議院ノ每一回之ヲ開クヲ以テ
定則トシ、開會以後云々トセバ體ヲ得ルニ似タリニ制定スベキ諸
 般ノ法律及新ニ租稅ヲ徵シ、國債ヲ起シ紙幣ヲ發行シ、年金ノ増額ヲ定メ、國庫保證ノ事業ヲ
 許可スルノ類ハ、朕自發議ノ權ニ據リ、ノロゼット起草セシメ之ヲ議院ノ議ニ付シ、議成ルノ後ニ於
 テ更ニ朕ガ裁可ヲ經之ヲ公布施行セシムベシ。

此憲法ヲ公布スル前ノ法律ニシテ此憲法ニ矛盾セザル者ハ、其法律規則條例又ハ何等ノ名稱
 ヲ用ヒタルニ拘ラズ、總テ將來ニ遵行ノ力ヲ有セシムベシ。此ノ憲法ヲ公布スル前ノ稅法ハ將
 來更ニ新法ヲ制定スルノ要用ヲ見ルマデハ、總テ舊額ニ依リ徵收スルノ效力アラシムベシ。此
 憲法ヲ公布スル前ニ既ニ定メタル國債國庫ノ保證及年金ハ、將來年度豫算ノ議ニ由テ之ヲ變更
 スルコトヲ得ザルベシ

將來若シ此憲法ノ中或ル條章ヲ改正スルノ必要ナル事宜ヲ見ルニ至ラバ、朕及朕ガ統繼ノ子
 孫ヨリ發議ノ權ヲ執リ、改正ノ案ヲ以テ之ヲ上下議院ニ付シ、上下議院ハ其出席員全員ノ四分
 ノ三ニ充テ、三分ノ二以上ノ多數ヲ得テ之ヲ可決スルニ非ザレバ敢テ專ニ之ヲ紛更スルコト勿
 ルベシ。其他上下議院ハ憲法改正ノ建議ヲ提出スルノ權ナキ者トス。

朕ハ國ノ隆盛ト臣民ノ幸福トヲ以テ朕ガ中心ノ欣榮トシ上
 祖宗ニ對シ謹テ盟誓ヲ宣ベ、下ハ朕ガ現在及將來ノ忠實ナル臣民ノ爲メニ憲法ヲ公布スルコト
 此ノ如シ。自今朕ガ在廷ノ大臣ハ朕ガ爲メニ此ノ憲法ヲ施行スルノ責ニ任ズベク、朕ガ現在及
 將來ノ臣民ハ此ノ憲法ニ對シ、朕ガ繼統ノ子孫ニ對スルト同ジク從順ノ義務ヲ負フベシ。

甲 案 目次

- 第一 根本條則
- 第二 國民
- 第三 內閣及參事院
- 第四 元老院及代議院
- 第五 司法權
- 第六 租稅及會計
- 第七 軍兵

計七十二條

第一章 根本條則

第一條

日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第二條

皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇子孫之ヲ繼承ス
 天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラザル帝國ノ元首ナリ

甲案試草正文

第三條

天皇ハ大政ヲ總攬シ此ノ憲法ニ於テ勅定スル所ノ條款ニ循ヒ之ヲ施行セシム

改正(第四)

天皇ハ一切ノ國權ヲ總攬シ此憲法ノ旨義ニ基キ大政ヲ施行ス

(第五)

天皇ハ諸大臣ノ輔弼ヲ以テ大政ヲ施行シ諸大臣ハ天皇ニ對シ合體及各自ニ責任ヲ有ス

(第六)

天皇ハ上下兩議院ノ贊襄ヲ以テ立法權ヲ施行ス

(第七)

天皇ハ法律ヲ裁可シ其發布及執行ヲ命ズ

(第八)

天皇ハ國家危急ノ場合及公共ノ危難ヲ避クル爲メ內閣ノ責任ヲ以テ法律ノ効力ヲ有スル勅令ヲ發ス

(第九)

日本帝國ノ疆域ハ現在ノ統一ニ屬スル版圖タルベシ

國疆ノ變更ハ專ラ法律ニ依ル

第四條

日本帝國ヲ組立テタル現在ノ疆土及附屬ノ島嶼ハ統一ノ版圖ニシテ永遠分割スベカラズ而シテ國疆ノ變更ハ法律ヲ以テ定ムルニアラザレバ其効ヲ有セズ

(第十)

天皇ハ爵位ヲ叙シ勳章其他ノ徽章ヲ賜與ス

(第十一)

天皇ハ陸海軍ヲ編制シ及之ヲ統率シ凡テ軍事ニ關スル最高命令ヲ下ス

(第十二)

天皇ハ宣戰講和權ヲ施行シ及之ニ關スル必要ナル命令ヲ發ス

(第十三)

天皇ハ日本帝國ヲ表章シ外國ト條約ヲ訂結ス

(第十四)

天皇ハ上下兩議院ヲ召集シ之ヲ開閉延長延期及解散ス

(第十五)

ブルナ指サ
ヨリ上ニ
向テ願ニ
訴テ願ト
セルモノ
ナシバ會
介セシメ
ルノ要チ
見ズ要チ
〇〇六六
條六十一
一條

第十條 軍隊ノ紀律ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム第七條第八條ハ其法律ニ矛盾セザル者ノ外軍隊ニ準行セズ

軍隊ノ紀律ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム第七條第八條ハ軍人軍屬ニ準行セズ但其軍律ニ於テ明ニ充許セラルモノハ此限ニアラズ

第三章 內閣及參事院

第十一條

天皇ハ內閣ニ臨御シ萬機ヲ聽覽ス

第十二條

內閣ハ各省大臣（及參事院議長）ヲ以テ組織ス

聽覽ノ下
ニ決裁ノ
ハ字ヲ加
ニ加
省字ハ除
ク

內閣ハ政務ヲ分擔スル各大臣ヲ以テ組織ス

第十三條

內閣總理大臣及各省大臣ハ其職務ニ就キ各々其責ニ任ズ

第十四條

就キノ下
ニ天皇ニ
對シテ
字ヲ加フ
五

內閣總理大臣各省大臣ノ進退ハ總テ天皇ノ大權ニ由ル

第十五條

法律勅令及其他國事ニ係ル詔勅ハ內閣總理大臣及主任ノ大臣又ハ臨時代理ノ大臣奉勅對署ス

第十六條

參事院ハ內閣ノ諮問ニ應ヘ法律勅命ヲ草按シ及特定ノ條項ニ就テハ行政ノ事務ヲ審査ス

（參事院ハ法律ノ疑義ヲ説明ス）

諮問ニ應
ヘ又命ニ
依リトス
ヘシ

第四章 元老院及代議院

第十七條

天皇ハ元老院代議院ノ輔翼ニ依リ立法ノ事ヲ行フ兩院議決ノ後天皇ノ裁可ヲ經ザレバ法律ヲ成

サズ

第十八條

國ノ安全ヲ保ツ爲メニ已ムヲ得ザルノ情狀ニ由リ急施ヲ要スル事宜アルトキハ勅令ヲ發シ法律ニ代フルコトヲ得此ノ勅令ハ次ノ開會ニ於テ兩議院ノ承認ヲ取ルヘシ

又第十八條

國會ノ叶同ヲ待タズシテ法律ヲ施行スル爲ニ又ハ國ノ安全ヲ維持スル爲ニ必要ナル勅令ヲ下

國ノ安全
院上ニ議
院閉會ノ
時ニ當リ
ノ九字ヲ
加フ六條
〇六條

足ニ似タ
リ割ルモ
妨ナカル
ベシ

ニ議員ニ付與スル委任囑托ハ總テ其効力ヲ有セズ

第二十七條

議員ハ非職武官ヲ除ク外國庫又ハ地方稅ノ俸給アル行政官屬ト相兼スルコトヲ得ズ官吏ニシテ議員ノ撰ニ應ズルトキハ非職タルベシ議員ニシテ官吏ニ任ズルトキハ議員ノ職ヲ失フベシ但教官技術官博物局員衛生會員其他將來ニ特ニ指定スル員屬ハ其職務ニ妨グズシテ議員ト相兼スルコトヲ得ベシ

僧侶ハ兩院ノ議員タルコトヲ得ズ

議員ハ文武官ノ現任ニアル者同時相兼スルコトヲ得ズ文武官員ニシテ議員ノ撰ニ應ズルトキハ退職ヲ乞フベシ議員ニシテ文武官吏ニ任ズル時ハ議員タルノ資格ヲ失フベシ但勅令ヲ以テ特ニ指定スル官吏ニシテ其職ニ妨グナク議員ヲ兼スルコトヲ明許スルモノハ此限ニアラズ

第二十八條

一人兩院ノ議員ヲ兼スルコトヲ得ズ

第二十九條

兩議院ハ毎年十一月上諭ヲ以テ之ヲ召集ス

十一月ヲ
創ル

第三十條

非常ノ要用アルニ當テハ特ニ上諭ヲ發シ臨時兩院ヲ召集ス
臨時會ノ會期ハ又上諭ニ由リ便宜ニ之ヲ定ムベシ

後項臨時會開院ノ期限ハ上諭ニ由リ便宜ニ之ヲ定ムヘシ

第三十一條

兩院ノ會期ハ三ヶ月トス

兩院ノ閉期ヲ延引スルハ上諭ニ由ルベシ

第三十二條

兩議院ノ開閉及延會ヲ命ズルハ總テ上諭ニ由ル

第三十三條

議院ノ開閉延會及閉院ノ延期ハ兩院同時ニ之ヲ行フ一議院解散ノ命ヲ受ケタルトキハ併セテ他ノ議院ヲ閉會スベシ

第三十四條

必要ノ場合ニ於テ兩議院又ハ一議院ヲ解散スルハ天皇ノ大權ニ由ル
議院解散ノ命ヲ受ケタルトキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ二月内ニ上諭ヲ以テ新タニ選舉ヲ行ハ

二月内ニ
上諭ヲ發

シトスベシムヘシ

解散ノ命ヲ受ケタル議員ハ仍再タビ選舉ニ當ルコトヲ得
(末項ハ不用ニ似タリ既ニ二十五條ニ於テ再選ニ當ルハ權ヲ附與セリ)

第三十五條

代議院ノ議長副議長ハ一會期ゴトニ議員之ヲ公選ス

代議院ノ議長副議長ハ議員總會ニ於テ之ヲ公選ス但其任期ハ議員選舉ノ期限ト同一ニスベシ

第三十六條

代議院ハ自ら其當選議員ノ資格ヲ検査シ退職又ハ除名ヲ議決ス

第三十七條

兩議院ノ會議ハ公聽ヲ許ス

但シ左ノ場合ニ於テハ公聽ヲ禁ズベシ

議長ノ權
過重ニ似
タリ

一、議長又ハ十名以上ノ議員ノ要求ニ由リ公聽人ヲ退散セシメ嗣デ議院ニ於テ秘密會議タルヘキコトヲ決議シタルトキ

二、天皇ノ勅命ヲ以テ内閣ヨリ秘密ノ通牒ヲ得タルトキ

秘密ノ會議ハ刊行スルコトヲ許サス

第三十八條

兩議院ハ出席議員半數ニ滿タザルトキハ議事ヲ開クコトヲ得ズ

第三十九條

議事ハ出席議員ノ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第四十條

但以下テ
節ル

内閣大臣及委員ハ何時タリトモ兩議院ニ出席シテ演說スルコトヲ得但議決ノ投評ニ加ハラズ

内閣大臣其委任ヲ受タル委員ハ何時タルトモ兩院ニ出席シ其意見ヲ述べ及議員ノ議ヲ聽クコトヲ得

第四十一條

兩議院ノ事務及會議ノ方法ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム議院内部ノ規則ハ兩議院ニ於テ之ヲ定メ上裁ヲ經テ施行ス

第四十二條

上下議院ハ相當ノ敬禮ヲ守リ天皇ニ意見ヲ建議スルコトヲ得

此條除ク
ベシ

第四十三條

此條モ不用

兩院ハ人民ヨリ呈出シタル請願ノ文書ヲ受ケ政府ニ移牒シ又ハ意見書ヲ付シ天皇ニ上奏シ或ハ主格大臣ノ辯明ヲ求ムルコトヲ得
請願ヲ受ルノ方法ハ法律及議院規則ノ定ムル所ニ依ル

第四十三條

此條不用

各院ハ必要ナリトスル場合ニ於テハ内閣大臣ニ質疑ノ文書ヲ送付シ其辯明ヲ求ムルコトヲ得

第四十四條

此條不用

兩議院ハ事務ヲ審査スル爲メニ各省ニ向テ必要ナル報告及證憑文書ヲ求ムルコトヲ得但シ各省ノ外他ノ官衙ニ向テハ直接ニ往復スルコトヲ得ズ

第四十五條

第二項ハ新開紙ノ責任ニシテ議員ノ責任ニ似タリ

兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ陳述シタル意見及投訴ニ付糾彈ヲ被ルコト無カルベシ但シ議院規則ニ於テ定ムル處分ハ此條ノ關涉スル所ニアラズ
議員自ラ其言論ヲ新聞紙ニ公布シタルトキハ普通ノ法ニ依リ責ニ任ズヘシ

第四十六條

内亂外亂ノ罪ナルモ所屬議院ノ要求

兩院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外亂ノ罪ヲ除ク外開會ノ間議院ノ承諾ナクシテ逮捕スルコトヲ得ズ

ニ依リ置カスベキ

前項ニ指定シタル場合ニ於テ議員ヲ逮捕シタルトキハ司法大臣ヨリ直チニ所屬議院ニ報知スベシ

議員ノ拘留ヲ受ケ及治罪ノ處分ヲ受ケタル者ニ付所屬議院ヨリ要求スルトキハ開會ノ間其處分ヲ置閣スヘシ

第五章 司法權

第四十七條

裁判ハ專法律ニ依ル裁判官ハ天皇ノ名代トシテ其職務ヲ行フ爲メニ不羈ノ權ヲ有ス

第四十八條

裁判官ハ天皇ノ任命ニ由ル法律ニ定ムル事由ニ由リ裁判ヲ經ルニアラザレバ免職又ハ非職ヲ命ゼラル、コトナシ

其滿六十五歳ヲ超ユ老退ノ故ニ由リ又ハ裁判編制及其區畫ノ變更ニ由リ非職ヲ命ズルハ前項ニ抵觸スルノ限リニ在ラズ

判事補及治安裁判所ノ判事ハ此ノ條例ニ依ラズ

第四十九條

裁判ノ對審及判決ハ之ヲ公行ズ

特ニ公行ヲ閉ルコトヲ得ルノ場合ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

第五十條

天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ズ

第五十一條

民事刑事事ヲ問ハズ裁判所編制裁判官職制及裁判章程ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五十二條

行政上ノ處分又ハ指令ニ對シ行政官吏ヲ訴フル者ハ司法上ノ訴ト分別シ行政裁判所ニ於テ之ヲ受理ス

第五十三條

行政裁判所ノ組織權限及訴訟手續ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム
司法部行政部ノ權限爭議ノ裁決ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ムベシ

第六章 租稅及會計

第五十四條

國稅ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五十五條

現在既定ノ租稅及將來ニ經常稅トシテ定ムベキ租稅ハ更ニ他ノ法律ヲ以テ之ヲ變革セザル限
リハ毎年一定ノ稅率ニ依リ之ヲ徵收スベシ

第五十六條

地方ノ費用ニ充ツル租稅ハ特ニ定メタル法律ノ限内ニ於テ各地方議會ノ議ヲ取り之ヲ徵收ス
ベシ

法律ハ已ムヲ得ザル場合ニ於テ地方議會ノ議決ニ依ラズシテ之ヲ徵收スルヲ得ベキノ特例ヲ
定ムベシ

第五十七條

歲出歲入ノ定額ハ毎年豫算表ヲ制定シ兩議院ノ承認ヲ經テ之ヲ公告スベシ

第五十八條

格別ノ時宜ニ因リテハ七年ヨリ長カラザル時間ヲ期シテ數年ノ繼續費ヲ議決スルコトヲ得ベ
シ

第五十九條

帝室費及特別ノ法律ヲ以テ定メタル歲出歲入又ハ法律ニ依リ政府ノ義務ニ於テ必要ナル歲出
ハ之ヲ豫算ニ掲グルモ毎年決議スルノ限ニ在ラズ

歳出ニ係ル現在既定ノ命令ハ總テ法律ノカアル者トシ本條ニ準ズベシ

第六十條

豫算ノ各款ニ就テ兩議院ノ議決ヲ經タル者ハ流用ヲ許サズ其各項ハ勅令ヲ以テ流用ヲ許スコトヲ得

第六十一條

兩議院ニ於テ豫算ヲ議決セザルトキハ政府ハ前年ノ豫算ニ依リ之ヲ施行スベシ

第六十二條

歳出歳入ノ決算ハ毎年會計検査院ノ審査報告ヲ併セ兩議院ニ附シ其承諾ヲ經テ之ヲ完結ス

第六十三條

已ムラ得ザル情狀ニ由リ一歳ノ支費豫算ニ超過シタルカ又ハ歳入其豫定ノ額ニ充タズシテ更ニ補充費ヲ支出シタルトキハ次年ノ開會ニ於テ之ヲ再議院ニ報告シ其承諾ヲ求ムベシ

第六十四條

會計検査院ハ會計出納ヲ監視シ毎年ノ決算ヲ検査ス會計検査院ノ編制及權限ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第六十五條

兩議院ノ承認ヲ經ザレバ國債ヲ起シ及國庫ノ負擔ニ係ル政府ノ保證ヲ與フルコトヲ得ズ

第七章 軍兵

第六十六條

徴兵ノ方法ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

平時ニ於テ毎年増員ノ數ハ現時ノ定額ヲ増加スルトキニ限り之ヲ議院ノ議ニ付スベシ

戰時ニ於テ國民軍ヲ徵集スルハ勅令ニ依ル

第六十七條

陸海軍ノ編制ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第六十八條

外國ノ軍隊ハ法律ニ據ルニ非ズシテ日本國ノ軍役ニ從事シ及日本國ノ土地ニ屯駐シ又ハ經過スルコトヲ許スコトヲ得ズ

第六十九條

常備軍隊ハ法律ノ定ムル時機ニ於テ文衙ノ請求ニ由リ内亂ヲ鎮壓シ及法律ヲ施行スル爲メニ之ヲ用ユルコトヲ得ズ

第七十條

軍隊ハ服務ノ内外ヲ論ゼズ多衆議事スルコトヲ得ズ命令ニ由ラズシテ集會スルコトヲ得ズ
軍隊ハ政談演說ヲ爲シ及參會シ又ハ政事ノ意見ヲ建白スルコトヲ得ズ

第七十一條

戰時又ハ内亂ニ當リ全國又ハ國ノ或ル部分ニ向テ戒嚴ノ令ヲ公布スルハ敕令ニ由ル
法律ハ戒嚴ノ節目及合圍ノ地方ニ限リ軍隊司令官ニ委任スル處分ノ場合ヲ定ム

第七十二條

陸軍及海軍裁判ハ陸軍及海軍刑法ニ依リ專軍屬ノ刑事ノ犯人及軍法ノ犯者ヲ處分ス

憲法資料上卷終

憲法資料上卷

人名索引

(イ)

- 伊藤博文 二、五、九、四〇、四一、四三、
五、三九、三九、
- 岩倉具視 五七、五八、
- 井上馨 三六、二七、
- 井上毅 四九、五六、五七、五八、一〇三、一〇四、
一〇七、一〇八、一〇九、一一一、二四、二九、一八三、
一八四、三〇六、三三五、三七〇、四四〇、四四八、四六八、
六三、
- 犬上王 六三、
- 壹志濃王 六三、

ロ エ ス レ ル

- 二七、二八、三〇、一四、三〇六、三二七、三三三、
三六、八九、一〇三、一〇四、一〇五、一一一、

索引

(ハ)

- ロ エ ン ネ 四六、
- ハイブリッヒ 八七、
- バイエルン 八九、
- 林田龜太郎 一八三、一八九、
- ハミルトン 一九五、

(ホ)

- 北條時房 六六、
- 北條泰時 六六、
- ホイケル 八五、
- ポトビルスキー 八五、
- ボク ラ 八六、
- ポーヘル 九六、
- ポアンナード 一八三、一八四、一八九、
- ポーリウ 一八二、

(ヘ)

ヘルド 一四六、
ヘンサム 一五、
ペオツル 四八三、

舍人親王 六七、

(子)

デヨージ二世 二九、三三、
デヨージ一世 五九、

(リ)

リヨンネー 一四、一四六、四三、四四三、四八三、

(ル)

ル 一、
ル 一七九、
ル ツク 八八、
ル ボン 三七、三三三、三三三、
ル キ十四世 四〇九、
ル エー 四七一、

(オ)

大隈重信 一五、二七一、

大山巖 一五、四六、四八、

大友皇子 三、

大津皇子 三、

忍壁皇子 三、

大木喬任 一〇三、二四、二五、二六、

オビワ 一四、

オーガスト 二九、

ワシントン 一五、

(カ)

カメーカ 八五、

金子堅太郎 二五、三七、三五、三九、三五六、

(タ)

谷森真男 九、一〇、二七、

高市皇子 三、

ダイセー 一〇、

(ラ)

ラーバンド 四六、

(ウ)

ウランゲル 八五、

ウル 八六、

ウキルヘルム 八七、九六、九七、五七九、

ウエツデル 八八、

宇川盛三郎 五〇三、五〇八、

ウキリヤム(オレンジ王) 五五五、

(ク)

黒田清隆 二、一五、

グロー(ヒュー、デ) 一五九、

草壁皇子 三、

桓武天皇 三、

グナイスト 六四、

(ヤ)

山田顯義 三六、一〇三、一〇四、一一一、一一二、一一三、

(レ)

レーダン 八五、

レオポルド 八七、

(ソ)

蘇我石川麿 三、

蘇我赤兒 三、

蘇我果亦臣 三、

(ツ)

ツエツブル 一三三、三三三、

(ネ)

ネツケル 四八〇、

(ナ)

中臣金連 三、

中橋徳五郎 二八、

オボレオン一世 四〇四、四〇九、四六七、四八〇、

ナボレオン三世 四〇九、四六九、四七〇、四七一、

山縣有明 一三、

(マ)

松方正義 一五、
マイエル 一四、

(ケ)

元明天皇 一四、
ゲルベル 一五、
ゲラルグマイエル 四三、

(フ)

ブライス 一三、二五、二六、
ブレイン 二〇、
プロック 一四、

(コ)

孝明天皇 一、六、七、
孝徳天皇 六、
巨勢人 三、

(エ)

榎本武陽 一五、

(テ)

天智天皇 一六、
天武天皇 一七、
寺島宗則 一八、

(ア)

阿部倉梯萬侶 一六、
阿島皇子 一七、
アルプレヒト 一八、
アダムス 一九、
アンソン 二〇、

(サ)

西郷從道 一六、
三條實美 一七、
サクセン 一八、
サルバイ 一九、
サヤ 二〇、

(キ)

紀大人 一六、
紀船守 一七、

(メ)

メレ 一五、

(シ)

神武天皇 一、六、七、
芝基皇子 一三、
持統天皇 一四、
聖武天皇 一五、
シユルチエー 一三、一四、一五、一六、一七、
シエフアーン 一八、
シドウキツク 一九、
澁澤榮一 二〇、

(ヒ)

土方久元 二一、

索引終

ビスマルク 一七、一九、二〇、二一、二二、
ヒユデグレース 一三、
ピツト 一四、

(モ)

森有禮 一六、
本尾敬三郎 一七、
モルトケ 一八、
モスセ 一九、
セチウイツグ 二〇、

(セ)

セチウイツグ 一九、

(ス)

スチルフリード 一六、
スタイン 一七、
スベンサー 一八、

昭和十年八月十日印刷
昭和十年八月十五日發行

【非賣品】



秘書類纂
憲法上
不許複製

校訂者 平塚篤

東京市杉並區上荻窪九六三

發行者 平塚篤

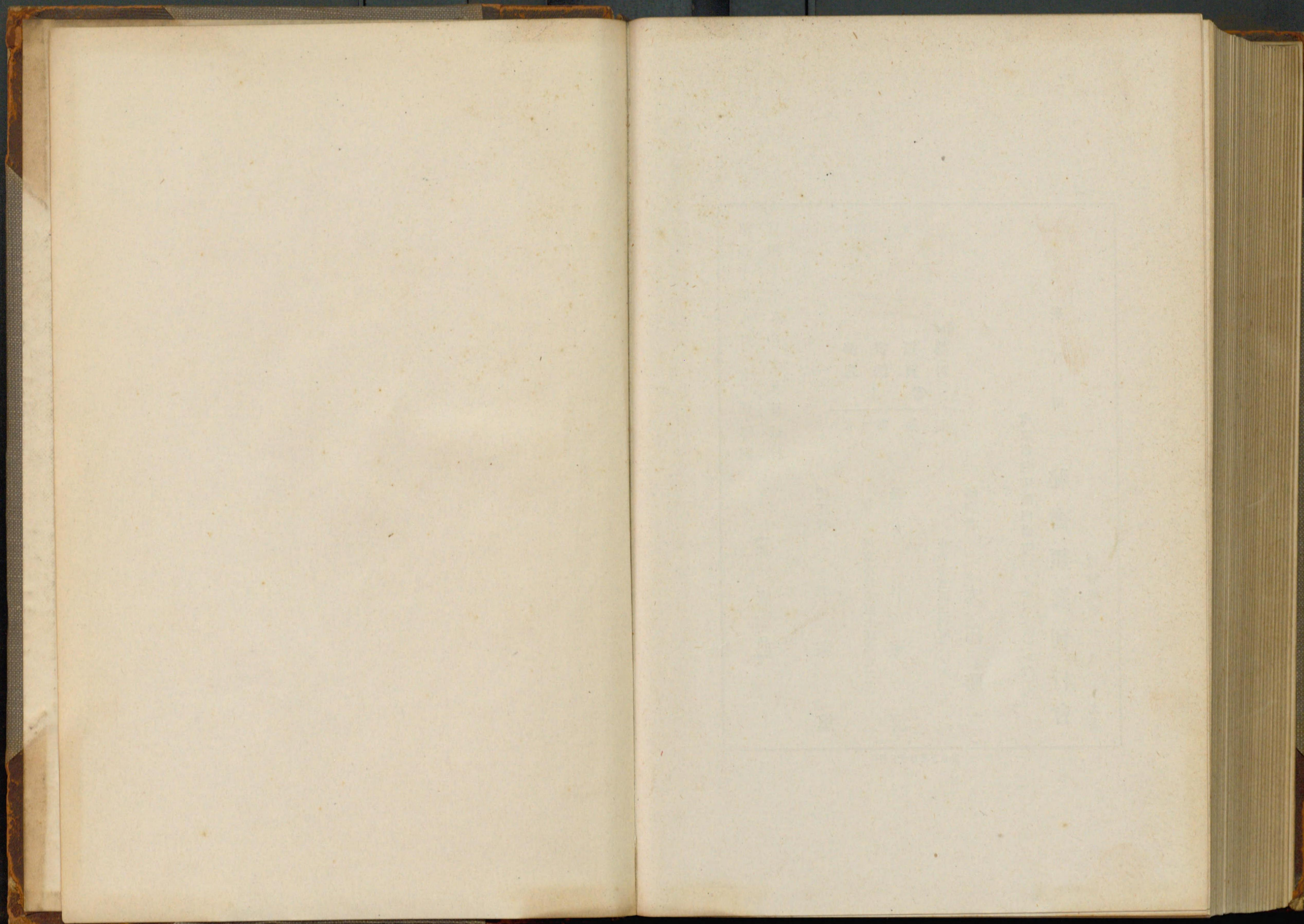
東京市芝區田村町二ノ六ノ五

印刷者 太田勝三

東京市麴町區內幸町一ノ三(大阪ビル內)

發行所 秘書類纂刊行會

電話銀座五一八一—九番



649
162

